
とある魔術の禁書目録 大罪者

黒羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録 大罪者

【Nコード】

N0604Y

【作者名】

黒羊

【あらすじ】

超能力が一般科学として認知される学園都市。そんな場所得上条当麻が魔術師なんていう胡散臭い少女と出会っているとき、隣の部屋でも不可思議な少女を拾った少年がいた。

巻（前書き）

- ・アニメではなく原作沿い
 - ・超電磁砲はアニメもマンガも見えないのでよくわかりません
 - ・時間軸に矛盾でる可能性大。
 - ・作者はパソコン初心者
 - ・文章打つのに慣れる練習なので更新は遅い
- よろしくお願いします。

巻

七月二十日。今日より、いや実質的には昨日の授業が終わったその瞬間から夏休みは始まっている。それは彼
神矢^{かみや} 真夜^{しんや}も同様であつた。

昨夜不良と追いかけてこする事も、学園都市最強の能力者に追いかける事もなく、今朝がた何故か止まっている電化製品の数々にも偶然食品が空だった冷蔵庫に被害はなく、朝食のカップ焼きそばを流し台にぶちまける事もなく、キャッシュカードを踏み砕く事もなかつた。

特に幸運でもない普通の夏休み初日を、学生寮で神矢は迎える。

「いい天気だし、布団でも干そうかな」

食べ終えた焼きそばの容器をゴミ袋に入れ、窓を貫く夏の空を見上げる。

乱れた布団を畳んで持ち上げ、ベランダに繋がる網戸を足で開ける。ベランダに出ると、既に何かが干してあつた。

「カップ？」

カップ。頭に皿がのってるキュウリ好きの妖怪ではなく、雨の日に

着る雨具の一つ。黄色のカツパが、我が家の柵に干されていた。だがしかし、昨夜は特に雨だった記憶もなく、それ以前に神矢はカツパなど持っていない。

よくよく見れば、干してあったのはカツパを着た少女だった。

「へ？」

藍色の瞳をまん丸にする。

一体どういう状況になればベランダの柵にカツパ姿の少女が干されているのだろうか。

茫然する神矢だったが、ぐったりと垂れ下がっていた少女の体がピクリと動く。下がっていた少女の首がのそりと上がる。紫色をした不思議な髪の間隙から、同色の瞳が気怠そうに神矢を見る。

少女の容姿は文句なく可愛らしくあったのだが、どうもそれだけではない。見た目小学生くらいなのだが、小学生らしい顔を何一つしていない。どこか酷く、歪んで見えた。

だが神矢が慌てたのはそんな事ではない。

「は、裸っ!？」

少女は裸だった。正確には素肌に直接黄色のカツパを羽織っただけの格好。

流行やファッションに疎い神矢だが、そんな奇抜な服装が流行っているとは思えない。

神矢の反応など聞いていないのか聞こえていないのか、少女は相変わらず気怠げな視線を向けたまま、呪いでもかけるようなおどろおどろしい声で言った。

「又シ、美味そうじゃの」

神矢は背筋に寒気が走った。

日本人とも外国人ともいえない顔立ちだったので日本語を喋った事についてはさして驚かなかった。だが、少女に声をかけられた瞬間背筋に寒気が走った。怖気と言ってもいいかもしれない。こんな年端もいかない少女相手に何故なのか、わからない。

「えーと」

気を取り直して、とりあえず聞き返してみる。

「美味しそう？ 僕が？」

「又シ意外誰がいるんじゃ」

けっ、とぞんざいな言葉遣いの少女。喋るとますます少女に見える。ぐきゅるる、と少女の露わになった腹が鳴った。

「腹が減った」

じっと見てくる少女。『美味しそう』ときて『腹が減った』となる。自分は食べられてしまうのだろうか。と冷や汗。しかし相手は巨大な化け物などではなく、変ではあれど少女。変だけど。

「とりあえず入りなよ」

曖昧な笑顔を浮かべて、神矢は非日常を招き入れる。

「不味い」

渋い顔で新たなカロリーメイトを口に放り込む。これで既に三箱あげた。

カップ麺は先程の焼きそばが最後で、冷蔵庫には食品はゼロ。仕方なく、非常食に置いてあったカロリーメイトを空腹の少女に与えて

みたのだが……。

「不味い」

不満らしい。しかし手は止まらない。

あれは大ききの割になかなか腹にたまるのだが、少女はまるでスナック菓子のように次々と平らげていく。

「次」

「ごめん。もう無いや」

「なんじゃ使えん」

舌打ちまでする。良くいえば優しい。悪くいえば気弱な少年は、傍若無人な少女の態度にも笑って応対する。

ちなみに、少女の格好は依然黄色のカツパのままだ。ただし胸は神矢の家にあつたさらしで隠した。しかしさすがに女性、それも少女の下着など男一人暮らしの家にある筈もなく、嫌々する少女に無理矢理ブカブカの短パンを穿かせた。丈が長くて足首まで覆っているが。

かくして、さらしに男物の短パン。その上に黄色のカツパというヘンテコ過ぎる格好を少女はしている。裸カツパとどちらが変かと問われると難しいが、倫理的には現状の方がマシである。絶対。

「とりあえず君の名前は？」

「己が名乗らず、れでいーに先に名乗らせるのか。無礼者」

「……僕は神矢 真夜」

もう諦めたのか、神矢は素直に従う。すると神矢の名を訊いた少女は片眉を引き上げて反応を示した。

「カミヤ シンヤ……なるほどなるほど」

口の中で転がすように復唱して値踏みするようにジロジロ見てくる。

「それで君の名前は？」

「ベル。どうじゃ？ 見た目通り、可愛い名じゃろっ？」

ニヤリと口の端を上げる少女。可愛いというには抵抗のある笑みだ。

日本語がペラペラだったが、どうやら日本人ではなかったらしい。かといって紫色の髪や瞳の国なんてあったらどうかと、内心首を傾げる。

「ベルちゃんは」

「気色悪い。ベルでよい」

折れそうになる心にめげず、続ける。

「ベルは僕の家のベランダで何してたの？」

「干されとった」

「干されって……どういう意味？」

「気持ちが悪くて寝ていたのだが、寝ている間に腹が減ったのう。気付いたら動けなくなっとった」

と、ウインク混じりに言われても神矢は反応に困る。

気持ちが悪くて他人の家のベランダで寝ている事も信じられないが、神矢の部屋は七階。向かいビルだし、部屋の扉には鍵だつてついている。一体何処から、どのような手段で彼女が神矢の部屋のベランダで干されるに至ったのかさっぱり見当がつかなかった。

そもそもベルはどこからやってきたのだろうか。この街は世間でいう最先端を遥かに凌駕する科学都市。住人の行動は、衛星カメラその他様々な角度から監視されており、よそ者の侵入など即座に発見及び排除される筈なのだ。

「シンヤ」

いきなり名前で呼ばれた事に少しドキリとした。しかして彼女は、友好的とは程遠い笑みで告げる。

「腹が減った」

副音声で『食べ物買ってこい』という声を聞き取った神矢はため息を吐く。ふと、今日は隣の部屋も騒がしいな、と逃避してみた。

「思ったより遅くなっちゃったなあ」

右手に買い物袋をさげ商店街を歩く神矢。バスでも乗ればもつと早い、が、どうも乗り物は好きになれず可能な限り徒歩を好む人物は、この学園でも稀有な存在であろう。しかしまあ、歩いていると予期せぬ場面とに出くわす事も少なくない。それが良い出来事か、ただの厄介事かどうかは別にして。ただし、そのほとんどが後者である事を神矢は経験から知っている。

「なあいいだろ？ おれ達と遊ぼうぜ」

ふと聞こえた声に目を向ける。飛び込んできた光景は、一人の少女が複数の男に囲まれているというべったべたな厄介事^{トラブル}。

神矢は辺りを見回す。通行人たちは勿論気付いているだろうが、皆目を合わせないように通り過ぎていく。警備員^{アンチスキル}が風紀委員^{ジャッチメント}辺りに通報はされているだろうが、駆け付けるまでまだ時間がかかるだろう。かといって、厄介事に好んで首を突っ込む物好きも少ない。

かくいう自分もその一人だった。無関係な事に率先して関わろうと思える程、神矢は奇特な人間では 否、余裕のある人間ではなかった。『なかった』というのは、昔ならと付け加える必要があるからだ。

「ふう」

ため息ともつかない吐息を漏らし、神矢の足は帰路からやや外れて厄介事^{トラブル}の中心に向けられた。

どうしてこうなのだろうか、と御坂 美琴は考える。手品でも魔法でもない、本物の能力開発を行う此処学園都市にて、最高位のレベルを与えられた七人の一人。『超能力者（レベル5）』第三位の電エレクトロロムスターマスター。この学園で自分を現すならこんなところか。

そんな自分はどうかやら絡まれやすい体質なのだと思最近自覚しつつある。お嬢様学校に通う身分にしては自分は少し俗っぽいとは思うが、そんな態度がこの手の馬鹿を引き寄せてしまうのだろうか。

美琴を困む複数人の男達。一見すれば危険極まりない光景だろうが、当の本人である彼女に焦りはおろか怯えすらない。なぜならその必要がないから。

この街では腕力に訴える暴力、イコール最強にはなりえない。そんなものより能力開発によって開花した能力の優劣が力を決める。美琴はこの学園都市においてその最高位を頂く存在。つまりそれはそのまま彼女の強さを表しているといつて過言ではない。目の前の男たちなど彼女にとって物の数ではない。

むしろ美琴は感心する。男たちは自分の事をまさか超能力者（レベル5）だと知って声をかけてきたわけではないだろうが、この制服は学園都市ではそれなりに有名な、高位能力者が集まる学校のものである。高位能力者の力の危険性は彼らとて知っている筈だが、迫力だけで押し切れるとも思っているのだろうか。所詮女だと見くびっているのだろうか。

（もっいつか……）

ぐずぐずしていると通報を受けたアンチスキルやジャッチメントが

やってきかねない。美琴にとってはそちらのほうが面倒だった。隠しもせず堂々とため息を吐き、男たちを撃退すべく能力を、

「あー」

男たち、そして美琴が視線を向ける。そこには少年が立っていた。少年と言っても美琴よりは年上で、多分高校生。茶色の髪に藍色の瞳。右手に買い物袋をさげ、左肩には細長い布袋　　おそらくは竹刀袋　　をかけている。無意識に期待していた人物ではなく、美琴はやや残念な気持ちになる。

（つてなによ残念で！　別に『アイツ』じゃないからってなんだってのよ！）

一人勝手に心の中でうがー、と喘いでいる美琴をよそに、男たちが少年に詰め寄る。

「なんだ兄ちゃん。なんか用か？」

「いやあ、用といつかなんとつか……」

歯切れの悪い少年の態度に、男たちの苛立ちが募る。

「そういつの、やめませんか？」

言った。言ってしまった。

『なんで』美琴はそう思わずにいらなかった。なんででしゃばった。自分は大丈夫なのに。いや仮に大丈夫でなくても、美琴がどんな目にあおうが彼には関係のない話だ。知り合いだったなら少しは納得も出来るがこの少年とは完全無欠に初対面だった。

それなのに……。他の人たちのように見て見ぬふりをすればいいのに。別に美琴は薄情だとは思わない。恨んだりなんかもしない。彼には初対面の自分を助ける義理も義務も権利だってありはしない。それなのに。

「
」

そうか。そうだった。いるのだこういう人間が。

ついさきほど思い浮かべたアイツも、こういったシチュエーションで出会っていたことを思い出す。

「なるほど、そうだな。つまり……」

少年の言葉に男の一人が笑う。ただし目は笑っていない。

「死にてえってことだな！」

拳を振り上げる。全体的にひよろりとした体型にあの態度、どう見ても美琴には少年が荒事に向いているとは思えなかった。ただのお人好しなら巻き込むのも可哀そうだ。そう思った美琴は、精密な操作のもと電撃を飛ばす。

男たちの数と同じ、五の紫電が蛇のようにうごめく。電撃は男たちに当たり気絶させる。そうなる筈だった。

一番に狙ったのは当然少年に殴り掛かった男。しかし、少年は自ら男との距離を縮め足をひっかけて横転させる。見事な足技に男は勢いそのまま地面に顔を強打する。それまではいい。

問題は、いままで男がいた位置に少年が割り込んでしまった為電撃が彼に向かっている事だ。

(ばっ……！)

顔を青くする美琴だったが、幸いにも電撃は少年を紙一重避けて彼方に消えた。

ほっとするのも束の間、仲間の一人が背後から少年に殴り掛かる。今度こそと紫電を放つが、さきほど同様少年は身軽な動きでそいつをあしらう。紫電は再び虚空を弾けた。

それでようやく美琴も違和感に気付く。少年が多少なり動けるのはわかったが、こつも偶然が重なる筈がない。この街で第三位の脳が答えを弾き出す。こんな偶然が続く確率は零だと。

結局、美琴の電撃はただの一度も男たちに当たることはなく、全て

少年があしらってしまった。それも両手がふさがったままで。

「ちょっと 안타ー！」

「ああ、大丈夫だった？」

よく見れば息ひとつ乱してやしない。

「なんで邪魔したのよ？」

感謝の言葉が出るよりも先に少年を問い詰める。少年も美琴が言いたいことが伝わったらしく、頬を掻くようにして曖昧な笑みを浮かべる。

「だって、危ないと思ったから。そついつの」

（やっぱり……）

少年は認めた。先ほどの彼の一連の動きは、向かってくる不良を撃退するだけではなく、美琴の電撃から無防備な男たちを守る為にとごとく軌道から外したのだ。

美琴の能力は音速よりも速い文字通り『光撃』だ。躲すのも至難であるそれを、躲させるとは。

「アンタ一体どんな能力使ったのよ？」

「能力？ 使ってないけど……」

「はあ!？」

能力を使っていない？ 能力を使わずに、電撃を回避したと本気で言っているのか。美琴はじっと少年を見る。

へらへらと困ったように笑う彼。どこからどう見てもスーパーマンには見えない。

「えーと」

見られているのに気恥ずかしさを感じたのか少年は身を引きながら。

「君も気を付けて帰ってね、お嬢ちゃん」

「おじよ」

少年は野次馬の視線から逃れるようにすたこらと立ち去ろうとする。

「私には……」

これは美琴にとって反射的な行為だった。あまりにもいつもの『アイツ』とのやり取りを酷似していたが為に、つい。

「御坂 美琴ってちゃんとした名前があんのよ!！」

「ええっ!?!？」

後に反省する。彼に対しては名乗った事すらなかった。

なぜこうなった、と神矢は考える。少女を助けようと思い首を突っ込んだはいいものの、結果的には不良達を助けた形になってしまったがそれはまだいい。解決したならまた厄介事が起きる前にさっさと立ち去ろうと思ったのだが、なぜ少女は突然激怒したのか。

「私には、御坂 美琴ってちゃんとした名前があんのよ!！」

(初耳だけどおお!?!?)

振り返ると、少女改め御坂 美琴の前髪から電撃の槍が放たれる。先ほどの紫電よりよほどスピードと威力に優れているらしく、神矢が攻撃を受ける疑問を抱く余地も与えず、既に手遅れだった。完全には躲せない。体を捻り、電撃の軌道からなんとか逃れられたのは体だけ。流れる体に合わせて引かれていた買い物袋は不運にも逃げ遅れ、哀れ槍の餌食となった。

電子レンジでチンなどと易しい結果であろう筈もなく、ビニール袋は焼き貫かれ、野菜や肉は爆散し、最後に宙を舞った卵パックがグシャリと切なげな音をたてて亡くなった。

「……………」美琴。

「……………」神矢。

ウィーンと機械的な音を立てて現れたのは、街を巡回するドラム缶型の清掃ロボット。ロボットは足周りに装備されたモップで地面にぶちまけられた食材だった物を綺麗に回収。そこらを二往復程すれば、まるで初めからそこには何もなかったかのように痕跡ひとつ残さず掃除を終える。役目を終えたロボットは何も言わず去っていく。無言のまま、二人を残して。

「……………」神矢はうなだれる。

「……………」美琴は思わず目をそらした。

およそ二日分の食糧が誰に食べられる事もなく消失した。特別ではない、誰にでも定期的に訪れる平凡な不幸だった。

貳

『のろま』。帰ってきて出迎えてくれた言葉がこれだ。

美琴との一件を経て、再び買い出しに商店街に戻り帰宅。おまけにたかだか学生の神矢に二度の買い出し後にバスに乗る贅沢が許されるはずもなく無一文の帰宅。美琴は弁償すると言い張っていたが、たとえ自分に非がなくとも年下からお金を受け取る度胸など神矢にはなかった。なので食い下がる彼女を実力行使で巻いていたのも、結果帰宅が遅れた理由の一つである。

帰ってみれば、空腹による筆舌しがたい目でベルに睨まれて神矢は本気で逃げ出したくなった。しかし逃げれば命がない事を直感的に悟り、とりあえず全力の謝罪と迅速に夕飯の支度に取り掛かる事にした。

「のろま。愚鈍。でくの坊。うすのろ」

呪詛のように居間から延々と罵声を浴びせてくる少女は、ガジガジとテーブルに噛り付いている。果たして料理が完成するのか先か、テーブルが少女によって食べられてしまうのが先か。本気で心配になる。

完成したパスタを皿に分け、レトルトの明太子ソースをかけて居間へ。どうやらテーブルは無事らしい。

少女の目の前と自分の前に置く。

「おお！」

ベルの目が輝く。この時初めて神矢には彼女が年相応の少女に見えた。

フォークを渡し、手を合わせる。

「いただきます」

神矢が言い終えるより先に少女の三つ又の矛はパスタに突貫していた。

フォークの使い方など一切構わず、すくっては口に頬張るベルを見て神矢は微笑む。なんでもない事なのに、彼女と一緒に神矢もなぜか幸せな気分だった。

はつきり言つて、見ず知らずの少女……それどころか怪しさ満点のベルを、神矢が律儀に世話をしやる理由だつて、ましてや飯を催促されるいわれはない。それでもこうしてベルが此処にいるのは、神矢の住む部屋のベランダにいたのは、神矢が彼女を通報するのではなく世話しているのは、
はたして、運命だったのかもしれない。

「むう？」

「どうしたの、ベル」

紫色の瞳が怪訝に歪む。その目は神矢に向いていた。

「カミヤの人間がわからんのか？」

「なにが？」

ベルは面倒そうにため息をついた後、いつも皮肉げに歪んでいる口を開いた。まるで医者に口内を見せる時のように。意図がつかめないベルの行動に、神矢は自然と少女に視線を集中する。小さな口内には、白い歯が綺麗に並んでいる。その中におさまる赤い舌。そこに、妙なマークが一瞬見えた気がした。

カチン、歯を鳴らしてベルが口を閉じる。ただそれだけで世界が変わった。否、世界が元の形を取り戻した。

「な……！？」

鳴り響く警報。聞こえていなかった筈のないそれが、突然耳に入る。今なり始めたわけではない。鳴っていたものが、ようやく意識出来るようになった。異常事態。

「ふん、人払いの刻印による認識阻害」ベルは改めてパスタを口に放りながら「んぐんぐ……魔術じゃよ」

「魔術……これが？」

ベルは不機嫌そうに眉を寄せる。

「なんじゃ、やっぱり知っておるではないか」

「知らない」

「？」

「昔、聞いた事があるだけだよ」

まるで悪い夢でも見ているような気分だった。

真実だ。神矢は魔術なんて代物は知らない。ただ神矢が幼い時、家でその言葉をよく聞いていた。神矢の家はかなり特殊で、『ある目的の為に』あらゆる術を研究していた。それは占いなんてものから一室に複雑怪奇な陣を描いている事まであった。だが父が死に、母が死に兄が死に、幼い神矢を残して家族が全員死んだ今、はたして実際それに効果があつたかなんて当時幼かつた神矢は知らない。知識として聞いていても見る事のなかつた魔術。それでもこれだけは覚えてる。家族は、本気だった。

「だから僕は実際に魔術なんて見たことなんてないし、実在するなんて今の今まで信じられなかった」

そう言ってから神矢は気付く。目の前の少女はなぜこんな事を知っているのか。なぜこんな平然としていられるのか。魔術なんて言葉を、なぜこつも当然のように口にすることができるのか。

「君は一体……」

「戦っておるな」

食事の手を止めずにベルは言う。

「なんて？」

「戦っているんよ、魔術師が」

『相手は素人じゃけどね』と付け加える。鳴り響く火災報知器の音を背景に、神矢は尋ねる。

「危険、なの？」

神矢の言葉に、少女は目をまん丸にした。そうして可愛らしい口から噴き出たのは嘲笑。

「安全な殺し合いなどあるものかよ」

ひゃっひゃと笑うベル。子供のように、しかし子供らしからぬ笑い。神矢はベルの返事を聞くと無言で玄関に向かう。立てかけてあった布袋から抜いたのは、何の変哲もない木刀。靴を履くまでに至って、ようやくベルから声がかかった。

「何処へ行く？」

「危険なんだよね？ なら助けに行くよ」

ちよつと忘れ物でも取りに行くかのように気軽そうに、まるで落ちていた財布を届けるような当然さで神矢は答える。ベルは一瞬笑うことをやめるほど啞然とする。

「又シは関係ないだろう？」

「うん」

「外の奴が知り合いなのかい？」

「わからない。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

どっちにしても助けるのだ、と言って神矢がまた曖昧な笑顔を浮かべる。そんな彼を、ベルは笑う。吐き捨てるように、敵意すら感じ

させる笑み。

「気持ち悪い」

神矢は反論することなく、苦笑を浮かべ部屋から飛び出た。

部屋に残されたベルは自分の分のパスタを平らげる。

「カミヤの人間が人助け」

クツクツと喜劇でも見たかのように独り笑う。その手は、まだ大分残っている少年のパスタの皿へ伸びた。

扉を隔てたそこは、まるで異世界にでも迷い込んだかのように神矢の知る日常から一変していた。

スプリングクラーから降りしきる雨の下、血だらけで倒れる少女。それを平然と見下ろす長身の神父。炎の魔人としかいいえない炎塊。何もかもがかけ離れた世界であったが、その炎の魔人を挟んだ向こう側に見知った顔があるのは神矢にとって救いだった。

「真夜!？」

黒いツンツン頭の少年、上条 当麻が神矢に気付いて声をあげる。何もわからない状況だったが、彼の存在があるだけで神矢の行動は決した。

「当麻! 何をしたらいい!？」

叫ぶ。状況の把握より何よりも先に。そうして倒れる少女の傍らに
いる赤い長髪の神父が、神矢の存在を認め振り返ると忌々しそうに
舌をうつ。ニメートルを超す身長に反して幼い顔立ちの少年だった。
漆黒の修道服を纏う、しかし神父と呼ぶには問題のある毒々しいア
クセサリーの数々。少年は余裕のない様子で歯を鳴らす。

「次から次に……邪魔だっ！」

少年は懐から紙を取り出す。コピー用紙だ。頭上の水に気を遣う素振りを見せながら紙ごと腕を横に薙ぐ。

「Fortiss931！」

咆哮と共に、薙いだ腕の軌跡をなぞるように生み出された炎剣が神矢に向かって放たれた。一瞬で周囲の水が蒸発する。

「真夜！！」

友人の声に遅れて、視界を埋め尽くす炎が到達する。

放った炎剣が間もなく消えて、赤毛の少年、魔術師ステイル・マグヌスは憤る。誰にでもなく愚かだった自分自身に。黒髪の少年にしてやられた己が殺したいほど憎かった。

ステイルの魔術はルーン（ゲルマン民族により二世紀から使われる魔術言語）による刻印を使うものだ。魔術は同じ意味さえもっていれば大それた道具など必要ない。少女漫画の付録でだって、数と絵柄さえ合っていれば占う事は可能なのだ。たとえ大量生産の、ただのコピー用紙でだって神秘の魔術は生み出せる。

しかし、意味を為すルーンを破壊されれば魔術は成り立たない。黒髪の少年は禁書目録のアドバイスがあつたからとはいえそれを見抜き、スプリンクラーの水でルーンを描いたインクを崩した。たつたそれだけの事で、ステイルの魔術のほとんどが無効化されてしまった。こうしている今も、消えていくルーンに比例して炎の巨人の体が崩れていく。

先ほど部屋から出てきた少年。どうやら黒髪の彼の友人だったらしいが、おそらく被害を出さないように張っていた結界もろとも効力が消えてしまい、騒ぎに気付いてしまったのだろう。

（運が悪かったね）

それだけ。ステイルが感じたのはそれだけだった。

たつた今殺した少年が、自分の目的とおそらく無関係であつただろうと理解していながら彼が感じたのはこの程度。飛び出てきた少年は運がなかった。それだけの事だ。

異常。異常だろう。しかし彼は魔術師だ。常識など破綻していて当然だった。

ステイルは足元に倒れ伏す少女を見る。白い修道服を着た少女。

「……………」

迷いなどある筈がない。たとえ誰であろうと殺す。いくらでも壊す。自分は目的の為にそう決めたのだから。

『インケンティウス魔女狩りの王』はかろうじてまだ生きてる。懐のルーンも、この水のせいで使い捨てになるとはいえまだ残っている。たとえあの黒髪の少年が魔術を打ち消す力を持っていても、これで少年を殺し、少女を回収すれば終わりだ。

決意を固めたステイルの前に少年が現れた。茶色の髪の毛の、ひ弱そうな少年。数瞬前、殺したはずの少年。

「な
」

ステイルが驚愕しながら、しかし止まる事がなかったのは戦闘のブ口であったからだろう。疑問より先に手は懐の紙を無造作に引き抜いた。炎剣が形を成す　　より速く、少年の木刀がステイルのルーンが描かれた紙を切り裂いた。今度こそ、ステイルの動きが止まる。

さらに踏み込んだ少年は、刀を地面と水平に構える。とステイルが確認するより先に少年が霞み、強烈な衝撃が横腹を襲った。遠くで黒髪の少年の右腕で弾け飛ぶ炎の魔人を見ながら、ステイルの意識は闇に消える。

倒れた魔術師の意識が完全になくなっていて、事を確認し、神矢は安堵と共に構えていた木刀を下す。神矢は魔術師の放った不意打ちにして通路を埋め尽くす回避不可の炎剣を、一度通路に身を投げ出し、片腕で手すりを掴んで落下を防ぐ荒業で回避したのだ。事前にベルとの会話で魔術という存在を把握していなければ、初撃の炎剣をこうも上手く躲す事は出来なかっただろう。おまけに炎剣そのものが相手に対しての目くらましにもなっていたようだった。

「真夜！」

「当麻」

駆け寄ってくる学生服姿の少年の名を神矢が口にする。彼の名は上条 当麻。ツンツン逆立った黒髪に、それ以外さした特徴の見当たらない少年は、人と関わるのが得意ではない神矢が名前で呼び合える数少ない友人だ。また、恩人でもある。

しかし、今の彼にいつもの陽気さは感じられず、神矢の無事を確認すると意識は床に倒れた銀髪の少女に向けられた。

「インデックス！」

少女の名前だろうか、と神矢は不審がらずにいられない。

見た目十四五歳といった銀髪の少女。その服装は、そこに倒れている赤毛の魔術師と同じ修道服。ただし彼女の場合、その色は純白で、随所の金色の刺繍もありまるでティーカップのようだった。

可愛らしい顔立ちをした彼女は死んだように静かに眠っている。否、事実危険な状態だった。

元々雪のように白かったであろう肌は、いまや危険なほど青ざめてさえいる。純白の修道服も、床に広がる彼女自身から流れ出た血の池に浸り赤く染め上げられている。そんな尋常ならざる血の量を、神矢は淡々と見る。

「その血の量は危険だ。早く救急車を

」

「駄目だ！」

携帯を取り出そうとした神矢の手を上条は止める。上条は自分の行動に一瞬はっとしたようだが、視線を泳がせるばかりで何かを話そうとはしない。話すべきか悩んでいるように、神矢には見えた。

「わかった」

「え？」

神矢は携帯をしまつ。

「事情は聞かない」

科学都市と呼ばれるこの場所で、魔術なんてものが入り込んだ時点で異常事態に違いない。上条がそんな異常事態に神矢を巻き込む事を迷っているのは、見て察するに明らかだった。しかし神矢は無理に聞き出そうとは思えなかった。

押し弱い性格から、というのもあったが、理由なんて必要なかった。神矢にとって上条という人間に無条件の信頼を寄せる事に躊躇いなど無い。なぜなら上条 当麻は神矢 真夜の友人なのだから。

上条は何か言いたそうに口を開きかけたが、遠くから鳴るサイレンに気付き結局止める。『ありがとう』それだけ言うと、一旦自身の部屋に戻りすぐまた出てくる。右手に白いフード（おそらく少女の）を持ち、銀髪の少女を背負ってエレベーターに飛び込んだ。

それを見送って 気配に従って振り返る。

女性がいた。腰まで届く長い黒髪をポニーテールに纏めた日本人の女性。そんな彼女を異様たらしめるのは、腰に差した二メートルを超す刀の存在。異常が続くこの場にとって、異様な女性はとてもしつくりくるものだった。

黒髪の女性は見つめる神矢と一瞬目を合わせるものの、すぐに視線を切り倒れている少年神父を抱えた。彼女がいくら女性にしては長

身で、また赤毛の男が少年とはいえ、意識のない人間を支えるのはたとえ支える相手が子供であっても容易ではない。しかし黒髪の女性には軽々とやってのける。

内心驚いている神矢と、女性はまた目を合わせる。小さくお辞儀をしたように神矢には見えた。

女性はそうして手すりを飛び越える。女性と、それに支えられる少年の体は重力に反して上昇し、向かいのビルの屋上に消えて行った。彼女もまた少年神父と同じ魔術師であろう事は間違いなかった。

「さて……」

辺りを見回す。焼け焦げたところか一部融解すらしているこの場を眺め、神矢はかゆくもない頬をかいた。

「なんて説明しよう」

段々と近付いてくるサイレンの音を背景に、神矢は一人終わった戦場で佇む。

参(前書き)

ちよつと短かっただですが、区切りが難しかったので

昨夜は酷い目にあつた。結局一人で現場に残される事になった神矢は、やってきた風紀委員ジャッジメントに事情説明を求められた。とはいっても全て正直に話すことは出来ない。友人との約束があるので、謎の少女、それと襲撃してきた魔術師についても誤魔化しながらの面倒な報告になった。

そもそもこの街の人間に魔術なんてものを訴えても神矢の頭が疑われる。

なので、この火災は通りすがりの学生能力者による通り魔放火、ということにした。事故にするには被害が大きすぎたので、嘘をつくにも多少の真実を織り交ぜる方が効果的なのだ。しかし、神矢の事情聴取をしていた風紀委員の少女、これがなかなか優秀らしく悉く神矢の報告の穴を突いてきて厄介なものだった。ツインテール少女。

そつえばあの風紀委員、いつぞやの電撃少女 御坂 美琴 だったか と同じ制服だった。はて、どこの制服だったか。

結構有名な所だった気がするが、元々そついった世間の流行には疎い神矢は思い出せない。

「まったく物好きなヤツめ」

声に反応して神矢が振り返る。ベットに寝転んでどこから持ってきたのかスナック菓子を食べる黄色のカツパ姿の少女。

「いつ戻ってきたの？」

「さつき」

昨夜は運良く現場の寮には神矢と上条を除いて不在だった。この場合運良くというのは語弊があり、おそらくあの魔術師が何かしらの処置をしていた可能性が高いが。

しかし念の為ということで、実際に火災があった友人部屋付近の部屋は消防の人間が改めて不在を確認した。そこでギクリとしたのは神矢。実は神矢も、この場を去った友人と同じく不思議なというより怪しい少女を拾っていた。そしておそらく、彼女は本来この街に入るのに必要なIDを持っていない。

基本『外の人間』を嫌う傾向の強いこの街で、IDいはすのなを持たない部外者げんが見つかれば大騒ぎになる。相手が少女だったとしてもこの街は容赦しない。

しかし神矢の心配をよそに、神矢の部屋にベルはいなかった。テールには空になった大皿が二枚だけ。

一時は神矢も彼女が夢か幻、もしくは幽霊の類だったのではないかと半ば納得しかけていたのだが彼女はいまこうして神矢の部屋のベットでぬくぬくと寝転がっていた。少女が戻ってきた事に少しほっとしている自分があることに神矢は驚いた。

「うむ……意外とイケる」

「物好きって？」

『激辛甘 新感覚チップス（シ・クワ―サー味）』と銘打たれた甘いんだか辛いんだか酸っぱいんだかわからないに菓子をざらざらと口に流す少女へ、神矢は尋ねる。

「ワシの記憶じゃあ、カミヤの人間に人助けをするような人格者がいるとは思わなかったわ」

神矢の表情が確かに強張った。その反応にベルは嬉しそうに口の端を歪める。

「……神矢を知ってるの？」

「知らんね。ワシはワシが知ってる事しか知らん」

それ以上話す事は無いというようにそっぽを向くベル。神矢としても、これ以上神矢の家について突っ込まれても冷静に会話できる自身がなかった。それでも訊いてみたかった。

「ねえベル。神矢は……父さん達は魔術師だったの？」

昨日初めて知った神秘の術。否、正確には知識として聞いていても、実際に触れるには至らなかった領域。魔術。

昨夜神矢の友人を襲った赤髪の神父はその神秘を扱う魔術師であっ

た。魔術は存在する。それは神矢も身をもつて理解した。
なら、ならば神矢が幼い時、あの狂気染みていた儀式や意味不明の
呪文を唱えていた父は魔術師だったのだろうか。毎日札をめくって
いた母は、異様な恰好をしていた兄は。

目の前の少女なら知っていると思った。神矢の知らなかった魔術に
精通し、おそらく神矢の家を知る彼女ならその答えを知っているの
ではないかと。

ベルは空になった菓子袋を放り捨てる。

「あれらを魔術師と呼んでいいかなど知らん」とてもつまらなさう
に「だがまあ少なくとも、いい顔をする人間はいないだろうがな」

ベルが何を言いたいのか神矢にはわからなかった。それでも理解出
来た事は二つ。

神矢の家が魔術師であれそうでもなくとも、やはりあの家は外れてい
たのだという事。 だから、神矢の家族は皆殺されたのだろ
うという事。

神矢の脳裏に蘇る映像。恐ろしいほど綺麗な満月の夜。炭化した母
親。ハリネズミのように体中を串刺しにされた兄。首から先が消失
した父親の体。

その他数十の屍の上に、ただ一人佇む少年。少年は月を、見上げて
いた。

「シんヤ」

意識が現在に戻る。かなり近くに少女の紫色の瞳があった。神矢は反射的にのけぞりながら、

「なに？」

「風呂に行くぞ」

ベルはとんでもないあくどい笑みでそんな事を言い出した。

風呂なら学生寮の部屋にはユニットバスが完備されている。それは勿論神矢の部屋にも。そう言った神矢に、少女はチツチツとわざとらしく言いながら立てた人差し指を振った。

「ばっか。ばかばか。日本に来たならデカイ風呂に決まっておるだろっつに」

「へえ。やっぱり外国からしたら日本のお風呂はそっつう印象なの？」

「広い風呂に男女入り乱れてウツハウツ八なんじゃろっつ？」

「冗談だよな？ 無いから。そんなお風呂探しても見つからないからな」

珍しくまともな発言と思いきや、ベルはやっぱりベルだった。顔を真っ赤にする神矢にベルが邪悪に笑う。明らかに確信犯だった。

とういうわけで、少女の願いを聞き届けた神矢は少女と共に銭湯に向かっていた。本音をいえば、昨日の食糧爆散により今月はなかなかお財布事情がピンチだったが、女の子の頼みを断れるほど神矢の女性スキルの熟練度は高くない。なにより、この少女に口でやりあって勝てる気がしない。

「ん？」

足を止めたのは神矢だった。進行方向に視線を固定させて。

「なんじゃ気付いたか」

「？」

「ああ……なるほど」一人勝手に納得した顔のベル。「魔術を知ったから、又シの眼が魔術を認識出来るようになったのか」

今一度神矢は視線を前方にやる。何の変哲のない大通りの空間に薄

ぼんやりと揺らめく透明なカーテンがかかっているようだった。そして不思議なのが、周囲の人間はそのカーテンより先に決して進むとはしない。不自然に、自然に、まるでその境界より先に道は無いというように通行人たちはそこを避ける。

それはまるで　　まるで昨夜、神矢がけたたましい火災ベルに気付かなかつたように。

神矢は無言で、背負っていた布袋から木刀を抜く。その姿を傍らで見ていたベルはあからさまに不機嫌そうに頬を膨らませた。

「けつ。また人助けかえ？」

苦笑にも似た笑みを浮かべる神矢に、少女は殺意すら感じる睨みをきかせる。

「又シは異常じゃ。魔術師の戦い、それが殺し合いだとわかっていて平然とそこに足を踏み入れる。それが自分の為ならまだしも他人の為だと？」

そんな目で睨まれても神矢は笑う。困ったような、笑み。

「僕はわからないんだ、普通が。そう育った。それに考えるのも苦手だから、どうしても考え方が極端になっちゃう」

「だからなにもかもを助けるのか？　それが償いだというなら」八

ツと吐き捨てる。「反吐が出る」

「違つよ」

神矢は足を踏み入れる。

「ただ、憧れたただけなんだ」

「？」

足を踏み入れる。魔術師まじゅしの戦いせかいへ。

中はやはり異質な空間だった。夜といってもまだ八時を過ぎたぐらい。夏休みの今ならそれなりの人間が歩いていておかしくないのに、此処には誰もいなかった。この空間だけが外と切り離されたように不気味な静寂。

「人払い」

ふと横を見ると、黄色いカッパの頭頂部があった。

「ついて来たの？」

「ぬかせ」

ぶっすーとした顔で歯を剥き出す。

「又シ とうか金がなけりゃ、ワシが風呂に入れんだろう
が」

「はつきりいなあ」

「心配でもして欲しかったか？ 自惚れるな。噛み砕くぞ」

照れ隠し成分ゼロの殺意を向けられて思わず身震いする。

「ステイルの人払いを誰が抜けてきたのかと思いましたか」

声は前方からだった。神矢達は足を止める。

「貴方でしたか」

声の主は長身の女性だった。黒い長髪をポニーテールにしているが、それでも毛先が腰に届くほど長い。上は白いTシャツをへそが見えるよう裾を縛って、下は着古したジーンズ。片脚だけ太ももが露出するほどぶった切られていた。

和美人が西部劇にでてくるような格好で、しかしその手には二メートルを超える長刀が鞘に収まったまま握られている。

神矢が彼女と出会うのは二度目だった。暗がりでもその存在感は圧倒的で、一瞬神矢も見蕩れてしまった。憚る理由は無いついように道路の真ん中に堂々と立つ彼女の足元で、見慣れた少年が倒れている。

恰好以外はサムライ然とした女性は神矢の視線が足元の少年に向いている事に気付いたようだった。

「彼の事なら心配ありません。気絶しているだけです」

「みたいですね」

上条の胸が、小さくではあるが上下しているのは神矢にも確認できた。

それで充分。死んでさえいなければ助ける事は出来る。それを知っている神矢は友人を傷つけた彼女に無策で飛び込むような真似をしないで済んだ。

「随分冷静ですね」

それが彼女には別の意味に取られたらしい。

「この少年を案じているように見えたのですが勘違いでしたか。やはり貴方が神矢の家の人間だというのは本当のようですね」

「知ってるんですか？」

「ええ」女性は目を閉じて「暗殺集団
供。 そうなのでしょう？ 神矢 真夜」

神矢。 貴方はその子

肆

暗殺集団。女性は言い、神矢はそれを否定しなかった。なぜなら彼女が言った事は真実だから。

「彼と同様、貴方の事も調べさせてもらいました。私の名は神裂かんざき火織かおり、と申します」

神裂は礼儀正しく頭を下げて名乗る。

「神裂さんは神矢の家を知ってるんですか？」

「……直接出会った事はありませんが。暗殺とは名ばかりで、その実態は殺す事そのものを目的にした殺戮狂。要人、裏の人間、同業者、民間人、動物も含め本当にあらゆるものを」

「神矢は金も名誉も求めていない。神矢はただこの世の全てを殺したいだけ」

神裂の言葉を引き継いだ神矢はそう続ける。

「故に同業にも嫌われる狂った殺害者」

それだけは神矢も幼い頃から教え込まれてきた。神矢は他の殺し屋の人たちのように金を求めるわけでも、裏で名をあげたいわけでもない。ただ殺したい。それだけを目的に殺してきた。殺したいから殺す。頼まれたから殺す。頼まれなかったから殺す。嫌いだから殺す。好きだから殺す。そこに居たから殺す。居なかつたから殺す。理由があつて殺す。理由がないから殺す。殺す。殺し続ける。

最悪にして最低の殺戮者。それが神矢。

「そんな神矢の人間が、一体何をしに来たのですか？」

そんな神矢の姿を知っているからだろう。神裂は不愉快そうな顔で問うてくる。

忌諱の感情は神矢を知る者ならだれでも向けてくる感情だ。殺す事を目的にした殺戮者なんて誰も良い印象など抱かない。それでも神矢は正直に己の目的を言葉にする。

「その人を助けに来ました」

神裂はびっくりした顔をした。

「なんと、言ったのですか？」

「その人は僕の友人で、僕はその人を助けに来ました」

聞き間違いでなかった事に、やはり神裂は驚いた様子だった。それも仕方ない。同業者にでさえ嫌われる、狂った殺害者と呼ばれるような人間がたつた一人の友人を助けに来たと言った。それを理由に神裂を殺しに来たのではなく、友人を助けに来たと。

「その言葉を信じると？」

「神矢は人を殺しても嘘はつきません」

それは神裂も聞いている話だった。それでも彼女はそこに立ち続けた。

「たとえ貴方の言葉が真実だったとしても、此処を譲るわけにはいきません」

その言葉に並々ならない覚悟が込められている事は神矢にも伝わってきた。それでも彼もまた退かない。

「 七閃」

チン、というつば鳴りの音が小さく、しかし確かな存在感をもって響いた。それだけで神矢の体は七筋の軌跡に切り刻まれる。そう彼

女は慢心でもなく事実として受け入れる。

その筈だった。

「な……！？」

少年は避けた。偶然やがむしやらかな回避ではなく、神裂の斬撃を目で追って確実に躲した。それどころか、

「ワイヤー、か」

見破った。ただの一度で神裂の七閃、その正体を見破った。

驚きを押し込め、神裂はもう一度七閃を放つ。傍目にはこれ見よがしなつば鳴りしか聞こえないだろう。事実、神裂は実際に刀を抜いて神速の斬撃を放っているわけではない。その行動はあくまで目くらましで、その動作で操る七本の鋼糸で相手を斬っている。言うほど簡単でもないように、また簡単に見切れるものなどではない。しかし、少年はまたも七の斬撃全てを見極め躲した。

今度こそ、神裂は動揺を隠すことが出来なかった。

「一体どうやって……」

神矢の一族は思考こそ狂っていても、特別身体能力や魔術に優れているわけではない。なにより、神裂 火織という存在はその程度で

どうにかなるほど簡単な存在ではない。

「僕も少し、特別な力を持つてるんです」

「異能力……」

魔術ではない異能。この街がそういったものを人工的に生み出す場所だというのは神裂も知っている。魔術師である自分には大抵詳しくまで理解出来ないがそれでも納得出来ない。

「貴方の事は調べたと言った筈です。貴方もこの少年と同じく、そういう能力に目覚めてはいない筈では？」

「目覚めていないんじゃないかと、わからないだけですよ」

今度は神矢の方が仕掛ける。神裂が刀を　　否、それに連動した鋼糸を構える。放たれる神速の刃。一つ一つが必殺足り得る威力をもつて、神矢を包み込む。

神矢にはその全てが見えていた。

迫りくる鋼糸の一本一本が。神裂の動き、表情、風の唸り、見えすぎる程その全てが見えている。それこそが神矢の能力だった。

必殺の渦にあえて飛び込み、唯一の綻びに身を滑り込ませる。皮一枚でかいくぐると神裂はもう目の前だった。彼女が何かに対して逡巡する。その隙を『視て』さらに一步踏み込んだ。

胸目掛けて木刀を振る。神裂は鞘に収めたままの刀を盾に防ぐ。激

突。神矢はさらに深く踏み込む。

彼女に今攻撃の意思はない。というより攻撃に迷っている。あの長刀を抜くことを躊躇っている。神裂の動揺、迷い、それによる彼女の行動が回避だということも『視た』神矢は遠慮なく間合いを詰める。木刀の刃を滑らせるようにして押し込み、柄による突きで強襲。しかし予想以上に神裂の動きは速く、結果突きは空振りに終わり離脱を許してしまう。

数メートルの間合いを取る神裂。あの神裂を退かせる。見る者が見れば卒倒しそうな光景だったが、それを為し得た彼は騒ぎ立てる事もなく淡々と刀を構える。

神崎は納得いかない顔で睨みつけた。少年の、黄金に変わったその左目を。

「その瞳……」

「能力を強く解放すると何故が変わってしまったんです」

「未来予知の類ですか？」

今の攻防、神矢は明らかに神裂が動くより先に動いていた。それは経験からなる先読みとかいうレベルではなく、神裂の動きを決めて動いているように見えた。しかもそれに何の躊躇いもなく、気味が悪いほどの確に。あれが運任せだとは思えない。

「正しくは未来予知じゃあないです」

少年は首を振って否定する。

「僕にはあらゆるものが見えるんです」

それは技の起こりを見極めるなんてものではない。踏み込みの強弱。筋肉の伸縮。鼓動。呼吸。発汗。血液の流れ。遠近。対象は相手だけに留まらない。視界に映るあらゆる情報が常人の何万倍にもなつて神矢に流れ込む。それによって神矢が得るのは世界の減速。そして限りなく精密な予知。

この能力を解放している時の神矢には世界が止まって見える。1ドットの動きだつて追える。そしてあらゆる情報を観測し、結果生まれるのは限りなく完全に近い未来予知。実際に未来が見えるわけではないが、一人の動きを先読みする程度容易い。

それが神矢の能力『絶対観測』^{ホライゾン}。

「予知ではなく予測、というわけですか。厄介ですね」

「それだけじゃないですよ」

神矢の金色の瞳が神裂を映す。

「昨日の人もあなたも、インデックスと呼ばれていたあの女の子が目的みたいですけど……すごく大切な人なんですね」

「私の心を……!?!」

「違いますよ」

驚愕する神裂に、神矢はバツが悪そうに笑った。

「すみません。これも見えるんです。体温の具合や鼓動の反応で対象の心理状態が視える」

神矢は左目の金色を指す。

「だから僕には神裂さんがあの子を心配している事はわかってても、なぜ大切なのか。大切な筈のあの子を怪我を負わせてまで追っている理由がなんなのかまではわかりません」

穏やかに笑う神矢に対して、神裂は辛そうだった。いや思えば初めから彼女は辛そうな顔をしていた。何かに追いつめられたような、まるでこれから親の死に目を見に行くような。覚悟したのではなく、覚悟を迫られた表情。

それこそがインデックスと呼ばれた少女に関係するのではないかと神矢は『観測』する。

「神裂さん、当麻はなんて言っていましたか？」

その質問に、彼女はよりいっそう厳しい表情になる。一見すれば鬼の形相だが、神矢には今にも泣きだしそうな少女の顔に見えた。神矢は足元で倒れる友人を見る。ぼろぼろの体は虫の息で、彼の能力の源である右手は見るに堪えない有り様だった。それでも上条は前に倒れていた。血だらけの拳は握りしめられていた。

「神裂さん、僕には神裂さん達の事情も、魔術の世界もまるでわかりません」

「なら、何故邪魔をするのですか？」

血を吐くような声だった。

「何も知らない他人が、どんな権利をもって私達の邪魔をするというんですか!？」

「当麻があの子を守りたいと願っているから」

「……本気で言っているんですか？ 殺戮者の一族である貴方が、本気でその友人を……他人を救うために戦っているか？」

「……あなたの言うとおりですよ」

神矢は殺戮者だ。そして自分も、間違いなくその因果を汲んでいる。

「でも一つだけ間違ってます。僕には誰かを救うなんてこと出来ません」

神矢は足元の少年を見やる。

「それが出来るのはこの人みたいな人達だけです」

「なら」神裂はきつく拳を握って「貴方はなにをするんですか？」

神矢は微笑む。

何をするかなんて決まっていた。自分には暴力ちからしかない。他人を殺す事しかできない暴力しか、神矢の身には宿っていない。あらゆるものを見通す瞳を持ちながら、正しい道なんてまったく見えなかった。なら使い道は一つしかなかった。

「僕は」

正しい道が見えないなら、正しい道に行く彼の背中を追いかけよう。

「僕は上条 当麻の幻想ねがいを守る」

この暴力でもって彼を守り、この瞳で彼の背中を見続ける。
こんな自分すら救ってみせた彼の道こそ、誰よりも正しいのだと信じて。

肆（後書き）

実質は前話と合わせて一つでした。

とりあえず神矢の家をちよろちよると。あと神矢の能力紹介の話でした。

なかなかめんどくさい言い回ししてたら書いてる自分までわけわからなくなってきました。やっぱり小説ってのは難しいもんです。

ちなみに神矢は『原石』にカテゴライズされます。何故かって？

それはそうした方が後々設定の穴を埋めやすいからだよ ごめんなさい

さらに補足すると、レベルは0です。何故かって？ じゃないと三巻のあの人（一応伏せる）と戦えないからですよ！！

では、これからもよろしくお願いします。

伍

一体これで何度目だろうか。鞘で殴られアスファルトを転がる少年を眺めて、神裂は嫌な気持ちになる。しかし彼は立ち上がる。『もうやめて欲しい』何度神裂が願っても、彼は立ち上がり、再び剣を構える。攻撃の意思がある限りこちらとしても黙っているわけにはいかない。突撃してくる彼を、また神裂は鞘に納めた刀で殴りつける。

それでもおかしいと神裂は思っていた。何故こう何度も自分の攻撃を神矢は受けて立っていられるのか？

いや、立っていられる理由はわかっている。彼は攻撃を受ける瞬間、自ら跳んで衝撃を逃がしたり、寸前で武器を挟んで防御している。神裂がわからないのは、何故彼にそんな事が出来るのか。

彼の能力はつまりずば抜けた洞察力からなる。それによって神裂の動きを先読みして動けるのはわかるが、だとしても納得がいかなかった。神裂はその程度でどうにかなる存在ではない。

神裂は聖人だ。世界に二十とない、神の子に似た特徴をもつ人間。あらゆる幸運、あらゆる願い、あらゆる力が彼女らには集まる。本人の意思に関係なく、だ。

その存在は科学的な例えをすると核兵器と等しい意味をもつ。そんな存在に、果たして先読み程度で抗うことなど可能か。答えは勿論否だ。

たとえ神矢が神懸った洞察力で神裂の動きを読んでも、彼女は神の如き力でそれを上回る。

じゃんけんの必勝法は簡単だ。出す直前の相手の手を見て、それに

勝てる手を自分が出せばいい。見切るところまでなら出来る人間もいるだろう。だが後出しに見えない、同時のタイミングで自分の手を変えられる人間はいないに等しい。何故ならそんな超人的な反応が不可能だからだ。

たとえ神裂の動きが見えていても、神矢は反応出来ない。事実、序盤の攻防以降、神裂の攻撃は幾度となく神矢に直撃している。

百歩譲って、彼が後出しに見えない反応速度を持っている人間だったとして、だとしても異常だ。上手く衝撃を減らしていても聖人の力でこう何度も殴られるのは、ドラム缶に詰められた状態でバットで袋叩きにされるよりずっと危険だ。それなのに、彼は再び立ち上がった。

「何故……」

遂に神裂は口にしてしまう。それほど動揺していた。

「昔から、体は丈夫に造られてるんです」

むしろこうして殴られている神矢の方が冷静だった。額から血を流し、今や先の黒髪の少年より傷だらけの筈だ。でありながら、片目を金色に光らせた少年は微笑みさえ浮かべる。

「退け、聖人」

声が一つ落ちる。聞くからに傲岸不遜の物言い。
突然の声の主を、しかし探す必要はなかった。

「子供……?」

少年の傍らに立つ位置に少女がいた。天気などお構いなしに、目がちかちかする黄色の雨合羽姿。歳の頃は禁書目録と呼ばれるあの子と同じくらいだが、紫色の瞳を嗜虐的に歪める様は似ても似つかない。

「みんなのアイドル、かーいいベルちゃん」

両手の人差し指を自身の丸いほっぺに当てて、キュピーン！と効果音でもつきそうな可愛らしく首を傾げる。確かに少女の容姿は可愛らしいものであるが、なぜかそんな仕草の何もかもが似合っていないかった。というより嘘くさかった。

「なんじゃつまらん」

誰からもなんのリアクションも得られなかったベルはコロリと表情を無然としたものに変えた。そちらの方が彼女に合っていると神裂は感じた。

「ベル。どこにいたの？」

「見とつたのよ。又シとそこのエロエロばでえーの女の戦いを」

「エロ　　っ！！」

これは左右非対称に魔術的な意味が、と言いかけて神裂はなんとか言葉を呑み込む。

「じゃけどもただ見とるのも暇じゃろ？　なんで観戦には食べ物が必要と思って探してた」

「だから口の周りにソースがついてるんだね」

まったく悪びれない少女。呆れながらもまるで少女の母親のように微笑みを向ける少年。彼らの関係が神裂にはまったくわからなかった。それこそ、間違いなく親子ではないということぐらいしか。しかし此処に足を踏み入れている以上、彼女もまた無関係ではあるまい。

「なんじゃ、まだいたのか」少女は神裂に目を向けて「さっさと帰りんさい」

「そう言われて退けるほどこちらも安い事情では　　」

「『去ね』」

ブワリと神裂の肌が泡立つ。

そうして気付く。自分が漆黒の鞘から刃を半ばまで抜きかかっている事に。神矢の思わぬ能力に動揺した時でさえ、理性が働き抜くことを拒んだそれを、神裂は今抜きかかっている。

恐怖したのだ。ロンドンでも十指に入る魔術師が。世界に二十といない聖人の自分が。

「なんじゃ？ 聖人なら耳も良いじゃろ。ワシの言葉が聞こえんかったか？」

少女は笑う。まるで目の前で怯えるネズミを眺める蛇のように。

神裂は戦慄した。この場、この瞬間。彼女の前では自分が餌に過ぎないと自身が認めてしまったことに。

神裂は刀にかけていた手を再度動かす。納める為ではない。この捕食者の前で、今この刀を抜かなければ危険だと彼女の本能が訴えていた。しかしその手は再び止まる事となる。

「そこまでだ、神裂」

「ステイル……」

背後に、赤い長髪の魔術師は口にくわえていた煙草を指に挟む。

「あの子には逃げられてしまったが、アレがあの状態ならむしろ好都合だろう」

ステイルの目は倒れ伏した少年を見る。次いで、その傍らの少年を見るがふいと逸らした。神裂は静かに目を閉じる。チン、と刀を鞘に納めた。

先を歩くステイルが持っていた煙草を横合いに放る。地面に接触した途端、不自然に燃え上がり、一瞬で消失する。その頃には神裂達は影も残さず消えていた。

「ふう」

神裂達の背中が消えて、ようやく疲れたように神矢はため息を吐く。正直あのまま続けられていたらこちらが危なかった。体中のあちこちが悲鳴をあげていて正直辛い。座り込んでしまいたいが、どうやら魔術師達の撤退と共に人払いの結界も解けてしまったらしい。辺りに人の気配が戻りつつある。

こんな場所で血だらけの少年二人見られれば騒ぎになってしまつてとりあえず、気絶している友人を背負つてどこか人目につかない場所に

「あー！！」

聞きなれた高音ボイスの叫び声。上条を背負つた神矢がそちらに目を向けると、小さな女の子が一人。見た目十二歳。こんな夜遅くに一人出歩いていたら確実にお叱りを受けた後、自宅に強制送還といつた本当に小さな女の子。

そんな少女が、こんな遅くに血だらけの男の子を見たとあつては悲鳴の一つあげてトラウマ抱えてもおかしくはない。が、彼女はそういった意味で悲鳴をあげたわけではないだろう。

なぜなら、

「か、上条ちゃんのみならず、あの大人しかった神矢ちゃんまで不良の道にー！！！」

なぜなら彼女は月詠つくよみ 小萌こもえという名の真正銘大人であり、歴とした教師であり、偶然かな神矢と上条の担任だった。本気で。

この状況下でとるべき反応が、さすがの神矢も思いつかずとりあえず、

「こんばんは、先生」

いつも通りの笑顔で挨拶してみた。しかし額からの流血でいつも通りの方がかえって怖かったのは、小萌の青ざめた顔を見て気付いた。

小萌の家に上条を運ぶと、出迎えたのはいつぞや見た銀髪のシスターだった。

彼女は陽気な顔で『おかえりー』と言った後、神矢を見て固まる。正確には彼に背負われた上条の姿を見て。

「……とうま？」

一瞬、茫然とした少女の目が大きく見開かれる。

「とうまー！」

突進する勢いで走ってくる少女を小萌が割り込んで止めた。

「ダメなのです、シスターちゃん！今はとりあえず上条ちゃんの手当てが先決なのです！」

小萌の言葉に、最初こそ動揺していた少女だったが、やがてその言い分を理解してこくと頷く。しかしその表情は真つ青のまま、唇はカタカタと震えている。

おそらく、彼女にとって上条がそれだけかけがえない人間になっているのだろう。そんな人物が血だらけで、それも意識を失って運ばれて来れば当然の反応といえた。その気持ちは神矢にもわかる。彼にとっても、上条はかけがえない人間だ。

「大丈夫」

だから神矢は何より少女を安心させる事を優先した。きっと、上条もそれを望んでいると思つて。

「当麻は死なない」

なるべく穏やかに、力強く言葉を伝える。

「ほんとう……?」

「うん。絶対死なせない」

覚悟をもって答える。神矢の自分が『死なせない』などと、父が生

きていたら大笑していただろう。今まで殺された者達はふざけるなと激昂していただろう。

それでも神矢は止めない。彼を助ける。絶対に……、そう決めたのだ。

処置は案外早く終わった。元々見た目ほど危険な状態ではなかった。それは上条の幸運というより、彼を傷つけたあの女魔術師が端から上条を殺すつもりがなかったからだろう。それでも重傷には変わらないが。

「神矢ちゃん……」

結局、シスターの少女と一緒に最後まで心配そうに見守っていた小萌。彼女が言いたい事はわかっている。

上条の傷は間違いなく病院に連れて行った方がいい。神矢が施したのはあくまで応急処置に過ぎない。しかし、そうなるとこの少女は一人になってしまう。

神矢が初めて少女と出会った時、彼女は尋常ではない出血をしていた。いま、少女にその時の様子は見られないが、そんな少女が上条と共にこの家にいるという事は、小萌も少なからず事情を知っているのだろう。

勿論、あんな危険な連中と小萌を関わらせる気は上条にも無いだろうからそこは上手く伏せているだろうが。

それでも小萌は、救急車を呼んで上条を病院に移動させるか悩んだ。それを言外に神矢に窺ってきた。

そんな視線に、神矢は首を横に振って引きとめた。

神矢とて事情を把握しているわけではないが、彼はいまこの少女を守る為に行動している。なら、神矢はなるべくその気持ちを優先してやりたい。

幸い、上条の傷も命に関わるようなものでもない。

「また明日来ます」

そう言っただち上がった神矢の袖を、小萌が慌てて止めた。

「何を言ってるのですか！？ 神矢ちゃんだって怪我を……あれ？」

袖を掴んだ少年の体には傷一つ無かった。

まるで狐か狸に化かされたかのように、目をまん丸にする小萌。生徒を気遣うそんな優しい先生に、神矢は微笑む。

小萌にはその笑顔が、なぜか痛々しく見えた。

「おかえり」

神矢が自宅に帰ると、居間でせんべいをバリバリ食べる黄色の雨合羽を着た少女が出迎えてくれた。神矢は一瞬きよとした顔をして、

「ただいま」

少女、ベルは顔を見るなりふん、と鼻息一つ。トコトコと可愛らしく近付いて来たかと思うと、突然神矢の衣服をはぎ取った。元々ボロボロだった制服が少女によって無残に床に捨てられる。ベルは邪悪に見える笑みを浮かべる。神裂との戦いでボロボロになった制服の下から、しかし少年の体は一切の傷が無かった。

「なるほど。これが『カミヤ』の作品か」

作品。その物言いに、神矢は一切否定しなかった。

自覚している。なぜなら神矢 真夜という少年はそう造られた。

神矢。彼らは元々魔術はおろか、殺人術すらもたないただの異常家族だった。特に当時の神矢の家族は見事に全員壊れていた。

そんなある日、はたしてそれは誰かの依頼だったのか、はたまた偶然だったのか……、そんな事など彼らにとって重要ではなく、いつも通り殺しを行おうとしていた。しかし、彼らは返り討ちに合った。父や母、兄がどんな手段を用いようと、時にその白刃を突き立てても、そいつは死ななかつた。

その時彼らが何を考えたのかなんて考えるのは簡単だった。

この存在を殺したい、と。

彼らはその存在に神を見た。今まで人間、獣、植物、あらゆるものを殺してきた彼らだったが神ばかりは殺した事はなかった。だから神矢の父達は探したのだ。『神を殺しうる方法を』。これは当時、神矢が生まれる前の話。

この一件を境に神矢の父達は魔術にのめり込む。だが結論が出るのは早かった。この程度では神を殺しきれない、と。

そうして父達が手を出したのは　科学だった。異端など彼らにとって知った事ではない。魔術を裏切り、今度は科学に答えを求める……が、結果はやはり同じだった。

魔術の貪欲な神秘も、科学の冷たい理論も確かに素晴らしい。それでも、あの時感じた圧倒的な存在を殺しうるには至らないとわかってしまう。

きっと彼らは地獄にいる気分だっただろう。自分達に殺せない存在がいると知った世界は、彼らにとって地獄と同義だった筈だ。

やがて父は思い至った。『神を殺す方法』が見つからない。ならば、ならば

神を殺す存在を造ればいい。

「ククク……」

暗い哄笑をベルはあげる。

「正確には『神と同じ存在を造る』だったか？　神を造れば、同じ

神を殺せない筈がない、と」

いよいよもつてベルは大笑いする。

「まったく大したものよ、又シの家族は。生まれついたその狂気が、結果あのヨハネでさえ危険視した十字教最初の異端者共と同じ思想に至ったんじゃない！」

十字教最初の異端宗派

『グノーシズム完全なる知性主義』。

人間に理解できないのならば、人間を超えた肉体を手に入れれば良い。人間は精製途中の神であり、己を鍛え上げることで神の肉体を手に入れ神の業を操る事が出来る。これがグノーシズムの考え。正確に言えば、神矢は神の力が欲しいわけではなく、神を殺す為にそこまで押し上げようという考えだった。そういった意味では、神矢の父達はこの異端宗派からもさらに外れていたわけだが。

「実際、又シの家族を返り討ったのは勿論『神』などではなく、ただの聖人に過ぎなかったわけじゃが……。そこんところ、又シの家族は知っていたんじゃないだろうか？」

聖人。

それは先日神矢が戦ったあの女魔術師、神裂と同じ存在。確かに彼女たちは普通の人間たちよりも神に近いかもしれないが、当然神に

は届かない。

だがあの時、神矢の家族はその存在に神を見たのだ。それが正しかったかどうかなんて関係ない。父達が結局その事に気付いていたか、神矢は知らない。

「しかしまあ、結局はこうして完成したわけか……………」

引き裂かれる笑みから、赤い舌が伸びる。血よりも赤い少女の舌には奇妙なシンボルが描かれているように見えた。二つの頂点を上に向けた逆さまの星。

「なあ、神を殺す者」

陸

それから三日間、神矢は小萌の家に通い上条の怪我の具合を確かめたり包帯を取り替えたりした。本当の目的は、再びあの魔術師達が襲って来たときの為だったが。

その間、少女とも何度か会話した。インデックスという名前（明らかに偽名だが）らしい彼女は、なんとというか見ていられなかった。彼女はまさに付つきりで、食事の時間でさえ上条の近くを離れようとはしなかった。それでも、おぼつかない様子で包帯を巻くのを手伝ったり、少しずつ元氣も取り戻しつつあった。

しかし、それでもやっぱり上条が目覚めた時、彼女は感情を爆発させた。

ほとんど八つ当たりのように叫んでいる少女に、意識を戻したばかりの少年はたじたじの様子だったが、やがて彼女の存在を認めるとほっとしたように見えた。

「……真夜」

「おはよう当麻。怪我は大丈夫？」

問いかけると彼は、安心させるように笑って答える。

「おう、全然痛くねえよ。つか、少しばっか大袈裟じゃねえか？」

その言葉は何よりも少女と少年の心を抉った。

痛くない。そんな筈はないのだ。上条はこれ以上ない重傷で、本来ならちゃんとした病院で治療を受けるべきなのだ。それなのに、痛くない。

つまりそれは、痛みを感じないほど体が壊れているという意味だ。

インデックスの反応でそれに気付いたらしい上条も、慌てて何か話題を振ろうとして、

「あれだな！ 外人さんは鼻毛も銀髪なんですね」

ピッキーン、とインデックスが固まる。少女だけではなく空気そのものが。

「とつまとつま」

「なんでございませう？」

「これ、なんだかわかる？」

「そりゃお前お粥……って待って！ 待ってインデックさん！！」

起きたそばからどったんばったん。

神矢は静かに立ち上がると部屋から出る。

扉に背を預けて、空を見上げる。

やっぱり上条は凄い男だ。インデックスの笑顔をあっさり取り戻してみせた。この三日間、本当の笑顔を浮かべられなかった少女が、今は大声で喚き、笑い、泣いている。

それは彼が彼女と培った信頼のなせる事なわけだが、きっと神矢が彼の立場でもそれは出来なかっただろう。

「敵わないなあ、やっぱり」

そんな自分もまた、彼のおかげで笑顔を手に入れたわけだが。

せめて小萌が帰って来るまで、と思っただけはらく外に出ていた神矢だったが、帰ってきた人物に思わずぎょっとする。

「魔術師!？」

そこに立っていたのは赤髪の神父と聖人の女性。紛れもなく上条を襲撃した魔術師達だった。

身構えた神矢は歯噛みする。木刀は部屋の中。今は丸腰だった。

「あの子は中だね？」

問いかけてきたのは、確かステイルとかいう名前の少年。

「どいてもらおうか」

「そう言われて僕が退くと思うのか？」

ステイルは啜えていた煙草を噛み千切りそうなほど苛立ちを露わにする。おそらくあと一秒と待たず神父が魔術を使おうかという瞬間、もう一人の魔術師、神裂がそれを制した。彼女は欠片程の敵意も見せない。

「もう、私達と貴方が戦う理由はありません。そこを通して下さい。おそらく『彼』もそれを望んでいます」

「？」

戦闘の意思は無い、という確認の後、部屋に上がった魔術師達と上条の会話は、事情を把握していない神矢にはさっぱりだった。

ただ、上条にとってもう彼らはたんなる敵ではなくなったという事

は感じ取れた。それになにより、おそらくこの出来事を中心であるうさぎの少女だけが、何故か会話から、彼らの会話から酷くズレてみえた。

なにかの時間を指定して去っていく魔術師達。

連日の看病の疲労なのかすぐに眠りについてしまうインデックス。病み上がりの上条もまた、同様に眠りに落ちてしまった。

ただ彼が眠る前に言った事を、神矢は思い出す。

魔術。魔道書。禁書目録と呼ばれる少女。魔術師たちの正体。完全記憶能力。そして、リミットの意味。

「そんなのって……」

あらゆる意味で救われない少女。親友を殺し続ける魔術師。

思いつかなかった。どれだけ考えても、何もかも救ってみせる方法が。それどころか一人だつて救つてやる方法が、思いつかなかった。結局、自分には何も救えない。少女の記憶を守つてやることも命を守つてやることも、心を傷つけ続ける魔術師たちの代わりを務めてやることさえ神矢には出来ない。

何もかもを観測する瞳も、壊れにくい体も、何の役にも立たない。

不意に電話が鳴った。

此処は小萌の家なので鳴っているのは勿論小萌の家の電話だ。外の技術にしても古いダイヤル式の黒電話。一瞬出ようか迷ったが、この音で二人が目覚ますのを嫌つて神矢は電話に出る。

『私です　　といつてわかりますか？』

聞き覚えのある声だった。忘れようのない声だともいえる。

「神裂　火織さん、でしたよね」

受話器の向こうの彼女は、内緒話でもするかのように声を押し殺していた。

『その声は神矢　真夜の方ですか』彼女は吐息を一つ『律儀なものですね。殺し合った者の名を一刻覚えていたとは』

「そついつあなたこそ」

言われた神裂は恥ずかしそうに咳払いをうつ。彼女はすぐにその声を真面目なものに切り替えて。

『私達の正体は聞きましたか？』

「……………」

『……………その反応から察するに、あらかたの事情は既に聞いたようで

すね』

「はい」

妙な沈黙はまるでゆっくりと刃物を突き刺されるようだった。

「神裂さん

」

『謝らないで下さい』

神矢の言葉を遮って神裂は言う。

『貴方はあの少年の友人として正しい行動を取っただけです』

「だとしても……！」

『だとしてもですよ』

神裂の声は冷静だった。だからこそ、その言葉には有無を言わせない不可視の重圧があった。

『時に、あの少年はいますか？』

一旦振り返り、眠っている上条を見る。

「います」

『電話を代わってもらえますか?』

その要求の意図を、神矢はすぐに察することが出来た。

「当麻を、諦めさせる気ですか」

無言だった。それは肯定だった。

「当麻はきつと認めませんよ」

『関係ありません。もし邪魔をするなら彼を砕くまで』

彼女の声は抜身の刀のように残酷なほど冷たい。しかしその裏にある、容易く砕けてしまう危うさに気付いているからこそ、神矢は彼女に何も言い返す事が出来なかった。

「ふざけんな」

「当麻!?!」

いつの間にか起き上がった彼は神矢の手から受話器を奪う。

「どいつもこいつも、自分の無能を他人に押し付けてんじゃねえよ！ 本当にお前らはそんな結末でいいっていいのか!？」

『いいわけがないでしょう』神裂は己の歯を砕くように『助けられるならとつくに助けています。こんな手段、誰だって使いたいわけないじゃないですか』

「だっていうなら……」

『彼女の完全記憶能力は呪いでも病気でもなく、たんなる体質に過ぎません』

体質にすぎなければそもそも手の出しようがない。なら少女の記憶を占領している十万三千冊の魔道書をどうにかすればいいが、そもそも少女や神裂達の上司は何より禁書目録の反乱を恐れている。そして彼ら教会にとって一年周期の記憶消去は都合の良い『首輪』だ。なら、仮に少女を助ける手段が魔術にあっても、おそらく作為的に少女に覚えさせる事を避けるだろう。

「なら科学は?」

上条は力強くそう言った。しかしその自信が端からハリボテである

ことは神矢にもすぐわかった。

これは所詮はつたりだ。いや、いずれ現実にしてみせる嘘だ。

『そう、思っていた時期もあつたんですけどね』

結局、信じ切れる筈がない。はたして、もし立場が逆だったなら、神矢や上条の友人や家族がどんな科学の力でも完全には治せなかったとして、科学の力ならとりあえず命だけは助かるのだと確定して、はたして命すら救えるかわからない魔術オカルトに大切な人間を預ける事は出来るだろうか。

きつと無理だ。結局、時間が足りなかった。

魔術側の神裂達に科学を説明する時間すら今は無い。

「……結局、分かり合う事なんざできねーんだな」

『ですね。同じモノを欲する者が全員手を繋ぐことが出来るなら、世界は平和になっているでしょう』

それまでだった。たった一人の同じ少女を救いたいと願った二人は、互いを完全に敵とみなす。誰でもない、同じ少女を救う為に。

結果は絶望的だった。頼みの綱は小萌だったが、元々専攻も違う^{マイ}記憶操作の環境を整えるのは彼女といえど難しかった。最初の絶望は、さらなる絶望を呼ぶ。気付いたのは上条だった。

「インデックス！」

さつきから決して小さくない音を立てているのにまったく起きる気配のない少女に不審をもった上条が近付くと、異常は顕著だった。呼吸も浅く、まるで高熱にうなされるように動かない。カンカン、とアパートを歩く音が聞こえる。『リミット』。そのワードが二人の脳裏によぎった。

扉が蹴破られる。現れた二人の魔術師は、決して処刑人でも死神でもない。むしろ彼らは少女の命を救う者。

しかしそれは同時に、少女が決して救われない事を意味していた。

ステイルは苛立つように煙草を吸い、何度もマンションに視線をやる。神裂は扉に背を預け、まるで眠るように目を瞑っている。それは少年に残された最後の時間だった。僅か十五分。いや、もはや時間の長さなど意味は持たない。たとえ何時間猶予があったところで、少女が救えない時点で同じことだった。

神矢は部屋を出る直前の上条を思い出す。言葉なんてかけられる筈
なかった。
強く握りしめた掌の皮が破れる。血が滴っても、神矢はやめようと
しない。

「貴方は、もう残る必要はないのですよ？」

神裂は閉じていた瞼を開いて言う。言葉こそ残酷に聞こえたが、彼
女の表情は辛そうだった。

「神裂の言う通りだ。元々君はあの男以上に部外者に過ぎない。何
処へなりともさっさと消えてくれないか？」

短くなった煙草を踏みにじるステイル。怒りに染まった彼の表情も
神矢には精一杯の虚勢に見える。

この場の誰もが沈んでいた。少女の命を救うというのに、少女を死
なせずに済むというのに、誰もかれも喜ぶ事など出来なかった。
少女の命は助かる。しかし、今この時を生きているインデックスと
いう名の女の子は死ぬ。喜べる事など出来る筈なかった。

神矢には誰も助けられない。何も救えない。

上条の願いだけは守るだなんて言うておいて、結局何も出来ない。

(それでも……)

それでもと神矢は思う。自分なんかとは違う。彼なら、彼ならこんな絶望だって。そう、願った。

瞬間、光が爆発した。

「は？」

間の抜けた声を出したのはステイルだった。とてつもない光量。ついで鼓膜を貫くような騒音。光が溢れだしているのは、扉の壊れたアパートの一室だった。少年と少女が最後を過ごしている筈の部屋だった。

最初に駆けたのは神矢だった。次いで背後から舌打ちと共に走り出すステイル。神裂と続くのを感じる。はたしてあの光が、後ろの二人にはどう映っているだろうか。わからない。だが少なくとも神矢にはこれ以上の絶望には思えなかった。これ以上の絶望など許さない。

願わくば、あそこに自分の役割がある事を願って。

小萌の部屋に飛び込むと、壮絶な光景が広がっていた。目の眩むような光の帯。その光を右腕一本で押さえつける上条。そして、救われる筈の少女の変わり果てた姿だった。

「馬鹿な……」決して揺らがない意思を見せていたステイルが、愕然としていた「なぜあの子が魔術を？」

少女は魔術を使えない。魔力がないから。ならば、何故彼女には魔力が無いのか？ 簡単だ。それはたんなる教会が吐いた嘘。ということとはつまり、

「インデックスが一年おきに記憶を消さなくちゃならないってのも大嘘だ！」上条は右手で光を蹴散らしながら「コイツの頭は教会の魔術に圧迫されてるだけだ！」

教会は、最初から神裂達に真実など伝えていなかった。

周期的な記憶消去自体、膨大な魔道書を記憶するインデックスに首輪を付けたいが為の作り上げた枷。

唐突の真実に、魔術師達は茫然としているようだった。

「冷静になって考えてみる！ この現実^{リアル}を見る！！
それさえ消しまえればインデックスの記憶を消す必要なんて無くな
っちゃう！！！」

ピクリと魔術師たちの体が震えた。やがて、黒衣の魔術師が血を吐くように告げる。

「Fortis931」

魔法名。

部屋に張り付けられるルーンのカード。しかしそれは決して上条を助ける為ではない。

「曖昧な可能性なんて、いらない」

本当に、血を吐くような言葉だった。それでも上条は振り返らない。

「つまんねえ理屈なんて関係ねえ！　一つだけ答える魔術師！！」

テメエはインデックスを助けたくないのかよ？

それまでだった。赤髪の魔術師はそれ以上何も言えなかった。

「神裂さん」

神矢が名を呼ぶと、彼女もまた怯える子供のように体を跳ねさせた。

「答えなんて決まっている筈です。もう目の前だ」

奇しくも。神矢の言葉は上条と重なった。

「手を伸ばせば届くんだ」

グキリと嫌な音が響く。上条の右手がついに吹き飛ばされた。

「Salvare000!!」

光の柱が上条を吹き飛ばす直前に神裂が叫ぶ。

神裂の刀に操られた七本のワイヤーがインデックスの足元を切り裂く。インデックスの眼球と連動した魔法陣は彼女の体が傾くに応じて空を向く。

アパートの壁が、天井が縦に割れる。それはまるで空を切り裂く巨大な光の剣のようだった。

光は木片すらも呑み込んで、代わりに光る白い羽を降らせる

神矢の左目が黄金に輝く。絶対観測。ホライゾン

左目で羽を視ると、頭が痛くなる程膨大なエネルギーを内包していた。一つ一つの羽全てに。

「当麻！ あの羽に触れちゃ駄目だ！」

「そんな事言ったって……！」

神裂の援護で難を逃れた上条は、注意を聞きながらも再びインデックスに向かって駆け出す。

たった数メートルが遠い。なにせ彼女は目を向けるだけでいいのだから。

空を向いていた光の剣が、上条に振り下ろされる。

「イノケンテイウス魔女狩りの王！」

上条の前に現れる炎の巨人。光の剣をその身で持って受け止めた。

「行け、能力者！」

ステイルの言葉に押されて再び駆ける。 しかしまだ遠い。

「警告」少女は冷たい声で「炎の魔術の術式を逆算に成功しました」
まるで他人事のように「対十字教用の術式を組み込み中。命名『エリ・レマ・サブクタニ神_エ』
よ、何故私を見捨てたのですか」

純白の色だった光の帯が鮮血のように赤く染まる。途端、倒れる筈のない獄炎の巨人は風船が破裂するように吹き飛んだ。
再び、その光が上条に襲い掛かる。その間に今度は神矢が飛び込んだ。

迫りくる鮮血の光。炎の巨人でさえ消し飛ばした力を前に、少年が手にする木刀はあまりにも頼りない物だった。それでも、神矢は刀を構える。

(視るんだ。 視ろ！)

巨大なエネルギーの塊である光の帯。それを神矢は観測する。観測し尽くす。

どんな強大な力でも、力は循環するものだ。それはつまり波。強弱の流れ。万遍なく均等に発揮する力なんて存在しない。

あらゆる情報が、本来知覚する事など不可能な目まぐるしい渦が左目を通じて神矢の頭に叩き込まれる。それは直接脳に杭を打たれるより凄まじい激痛を伴う。許容量を遥かに上回る情報の濁流に脳が悲鳴をあげる。

それでも、一秒をさらに分割した世界で神矢は目の前の魔術を観測し続ける。限界を訴えるように左目から鮮血が溢れた。それでも神矢は決してやめない。

(耐えてみせろよ！ 神様を殺せるっていうなら、こんなものぐらい壊してみせろ！！)

その時、遂に視えた。光の中の力の流れ。そのほつれ。

「そ、こだああああああ！！」

木刀の切っ先をそこ目掛けて突き出す。

一瞬だった。

たかだか木に過ぎない刀は一瞬で消し飛び、衝撃が伝わった両腕から血が噴き出す。さらに神矢は後ろに吹き飛ばされる。しかし、光は背後の上条に当たる事は無かった。

「!?!」

この場の誰もが驚いた。

何もかもを飲み込む筈の光が、一瞬だが確かに崩れた。

すぐさま、インデックスは光の剣を再射出する。しかしそれよりも、上条の手が早い。

「この世界が、神様アンタの作った奇跡システムの通り動いてるってんなら

」

薄れゆく意識の中で神矢は思い出す。

かつて自分を救ってくれた少年の顔を。世界を一度粉々に壊してくれた救世主ヒーローの言葉を。

「まずは、その幻想をぶち殺す!!」

上条の右手が、遂に絶望に縛られた少女に届いた。

？

扉の前で神矢は足を止めていた。此処は病院で、彼自身先ほど治療が終わったところだった。

全身に傷は一切見当たらず、白い眼帯が左目に当てられているだけだった。それすら実際必要無い。

神矢が此処に来たのは自分の病室に戻ってきたわけではなく、この部屋にいるであろう友人を見舞いに来たのである。

しかし、神矢はなかなか扉を開けない。

「ふんぎゃあああああああ！！！！」

すると扉の奥から絶叫。あの最終決戦でさえあげない絶叫。

ひとりで扉が開かれた。中から出てきたのは、白い修道服を着た銀髪の少女だった。

可愛らしく膨らませている頬は、神矢を見るなりしぼんだ。

「あ、シンヤ」

彼女は名を呼んだ。たったそれだけのことが、神矢にしてみれば涙を流せるほど感動的な瞬間だった。……生憎、この数年涙を流した記憶がないので、今回も例にもれず涙は出なかった。代わりにいつもの曖昧な笑みを浮かべる。

「調子良さそうだね」

「うん！」

本当に、キラキラするような笑顔を浮かべる。

「どうしたインデックス？」

仕切りのカーテンの向こうから声。

それを聞くなり少女はまた頬を可愛らしくふくらませる。

「なんでもない！」

そうして立ち去ってしまう。

カーテンが開かれる。神矢は息を呑んだ。

枕は中の羽を巻き上げて、涙を浮かべて頭を押さえている少年。ツ
ンツン頭には包帯がグルグルと巻かれており、右腕、おそろく目に
見えない場所にも傷があるだろう。

しかし、少年はそこに居た。上条はそこに居た。

「えーと……」

神矢を見つけた上条は目を泳がせて愛想笑いを浮かべる。それは恥ずかしい悲鳴とか姿を、友人に見られて気恥ずかしいのか。そう。

そう信じたかった。神矢は噛み合わない歯を食いしばって、笑った。

「クラスメートの顔忘れるほど強く噛まれたの？ 神矢だよ。神矢真夜」

「あ、ああ！」上条はようやく、わざとらしく手をぽんと叩く動作をして「神矢な」

本気で、泣きそうだった。

「そうだよ」

あれは記憶喪失というより、記憶破壊だね？

神矢が気を失ってからの話だった。

少女を救った少年の頭に、優しく羽は舞い降りた。凄まじいエネルギーの塊であった羽は、少年の頭蓋にダメージを与えるのではなく脳細胞を直接傷つけた。結果、少年は殺された。

記憶を抜かれたわけでも封じられたわけでもなく、壊された記憶にも種類があり、記憶を失った少年が歩き方や喋り方を忘れた

りするわけではない。少年が失ったのは『思い出』だった。つまりそれは、いままで少年を形成していた全てを意味する。昨日まで笑い、泣き、怒った少年はもういない。もう一生戻る事はない。昨日までいた上条 当麻は、死んだ。

「神矢？」

いま彼は見ず知らずの少年と話しているだけだ。それでも少年はそれに気付かれたくないようだった。理由はわかる。それはきつと、あの少女の為だ。それはまるで、神矢の知る上条のような考えだった。だつたら

「うん」神矢は笑顔を浮かべる「お大事に。また明日……上条」

「おう」

当然その違和感に気付くことなく少年は手を振る。それがとても、悔しかった。

なるべく自然に、それでも少し早足で部屋を出る。

「おや？」

廊下でカエルに似た顔立ちの小太りな医者と出会う。

「お久しぶりです」

この医者とは顔見知りだった。

「久しぶり、とは言っても君ほど治療のし甲斐の無い患者もいないのだがね？ それにしても　酷い顔だね？」

医者は言う。泣いてしまったのかと思っただが、目をぬぐっても涙は出ていない。

「僕、笑ってないですか？」

「舐めてもらっちゃ困るね？　僕は医者だよ？」

むしろ、そう言う医者の方が泣きそうな顔に見えた。それははたして、彼が神矢の心を鏡のように映しただけかもしれない。

神矢　真夜は無力だ。誰かを救う事も出来ない。たった一人の友人を守ってやる事すら出来なかった。

なら、ならばせめて、彼の知る上条　当麻が救った少女は守ってみせる。そして、もう二度と彼を見殺しにはしない。あの二人だけは、守ってみせる。絶対に。

そう、決意した。

シークレット・エピソード

少女は一人歩いていた。晴天にも関わらず黄色い雨合羽を羽織り、胸にはさらし、ズボンは男物の半ズボンだったが、丈の長さが合わず少女の足首まで届いている。とにかく変な格好をした少女だった。

通行人の奇異の目など一切構わず、少女は鼻歌混じりに歩く。ふと、行き会ったのは携帯ショップだった。規模の小さな店で、物を売るといふよりいらなくなった携帯を預かって処分するのを専門にしているようだった。暇そうな女性店員が、店先の少女に気付いた。

「のおのお、又シよ」

奇妙であり、殿様のようなどこか上からの喋り方。格好と相まって怪しい少女の呼びかけに、しかし店員は律儀に応える。

「なにかお探しですか？」

「これはなんじゃ？」

少女が指さしたのは、店先の段ボールに集められた処分用携帯だった。そう説明してやると、少女は興味深そうにそれを眺め、一つ手に取る。

「これくれ」

店員は一瞬迷ったが、少女が手に取ったのはデータの処理は勿論、バッテリーまで無いただの外装のみとなった物だった。玩具気分でも携帯が欲しいのかと、思わず微笑ましくなった店員は少女に携帯をあげることにした。

「なるほど、これがケータイか」

先ほど貰った携帯をまじまじと見ながら嬉々とするベル。やがて適当な路地に入る。別に此処が良かったわけではない。どこだってよかった。ベルは手にした伽藍の携帯を耳にあてる。

「もーしもーし」

きつと、この場に先ほどの女性店員でもいたらその光景はとて心温まるものだったに違いない。契約はおるかバッテリーすら入っていないそれは、玩具以上に機能をもたない。

『これは何とも妙な客だ』

筈だった。

電話の向こうから声が届く。
重ねていうが、ベルの携帯は携帯会社との契約はおるか、チップもバッテリーも無い。ゴミとしての機能以上にも持たない筈のそれが、なんと通じてしまった。

その声は、とある窓の無いビルから届いていた。大人にも子供にも老翁にも老婆にも、囚人にも聖人にも聞こえる声で。

「なんじゃ、本当に生きておったのか。逃亡者」

『はて。逃亡者とは？ 人違いではないかな？』

電話の向こうで、そいつは笑っていた。

「はん。ならそれでもよいよ。どっかの誰か」

しかし、笑っているのは少女も同じだった。

「昨日は随分楽しませてもらった。禁書目録に、あの妙な腕を持つ小僧」

「それはなによりだ」

「じゃがまあ、ワシのお気に入りはやっぱりシンヤじゃな」

「ああ、神矢の作品か」

「おおとも。可愛い奴よ。『神矢』だからではなく、人があれだけ歪んだ姿というのはなんともカワイイ」

唇に舌を這わせるベル。電話の向こうで、そいつはまた笑った。

「絶対観測^{ホライゾン}も気の毒な事だ。大罪^{ド・クリム}者の君に気に入られてしまうとは」

「何を言う。ワシは又シほど性格は悪くないぞ、アレイスター」
「コロコロと笑い」「むしろ又シなどという異物と同じ時代に生まれたすべての存在にワシは同情する」

「私も、君ほど性格が悪いとは思わないが」

ベルは路地から空を見上げる。ビルに挟まれた空は長方形で、狭かった。

「なあアレイスター。ワシはしばらくこの街にいようと思う」

『それはまた……。とても嬉しくない話した』

「なに、礼はいらんよ」「ニヤリと笑い「この街は存外面白い。暇を潰すには最適じゃ。又シの遊戯の結末も気になる」

『だがなあ』とベルは続ける。そのまま耳から電話を離し、頭上に掲げる。その下で、少女は口を開いた。

手を離れた携帯は重力に従い落下し、なんと少女の口の中へ。さらにベルはそれを吐き出すのではなく、噛み砕いた。

バリバリと、まるでスナック菓子を食べるように携帯を咀嚼し、ゴクリと呑み込んでしまった。

「らすとシーンがつまらなかつたら、又シを含めてこの街全てたいらげてしまっぞ?」

最早その言葉が届いているかもわからない者へ、ベルは告げる。届いていなくても、彼女はいつでもよかった。

精々自分の空腹を満たしてくれ、と空に向かって言うておく。

ぐう、と少女の腹の虫が鳴った。

「シンヤの奴、もう帰っとるかなあ」

少女は家に帰る。今日は甘い物が食べたい気分だ。

シークレット・エピソード（後書き）

とりあえず此処で第一巻完、となります。

読んでくれた皆様ありがとうございます。

二部以降もこういったように原作をなぞる展開になります。

自分とすれば早くあの白い方を出したいけれど、此処は我慢。二次だとみんな飛ばしてしまう二巻を書こうと思います。

ええ、私は彼女を応援してます。一番ではないけども おい

>反省点

長すぎましたね。最後のシークレットを抜いても七つは長すぎました。

いくら説明が多くなる一巻といえど、もっと上手くシーンの取捨していかないといけませんね。これを課題にしよう。

ベルは基本謎です。もしかしたら最後まで謎です（！？）。

まあ、傍観者と受け止めてあげて下さい。

さてさて、それでは次回も読んでいただけるようなら宜しくお願ひします。

それと感想やら評価やら、ありがとうございます！めっちゃ嬉しいツス！

追伸

これのおかげかはわかりませんが、少しずつ文章打つのにも慣れてきました。ブラインドは無理ですが

巻（前書き）

第二部です。

> 今日初めてアクセス解析やら、お気に入り登録人数が見られる事を知りました。

しかしユニークやらPVやら、どれを見て喜ばいいのかいまいちシステムが理解出来なくてわかりませんでした（汗

なんで累計で喜ぼうと思います！ お気に入り9人、PV3000以上、ユニーク800以上ありますがとうございました！
これからもどうぞよろしくお願いします。

巻

八月八日、神矢はうだるような暑さの中を徒歩で移動していた。この科学都市で、何故そんな原始的手段を彼が選択しているのかというのと、ただ単に少年はあまり乗り物を好んでいないというだけ。乗り物に弱いというわけではない。好んでいないのだ。ちなみに、パソコンなどの機械全般に弱いという、この街の人間にしてはかなりレアな人間だったりもする。

空から照りつける太陽と、熱を帯びたコンクリートに挟まれて軽い拷問を受けているようだった。

さて、何故神矢がこんな暑い中を出歩いているのかというと、特に深くもない事情がある。

『暑い。アイスが食べたい』

以上。

誰のセリフか言う必要は無いかもしれないが、一応言っておくなら現在神矢の部屋に住んでいる 匿っている 少女の言である。

ベルという名の少女は、夏休み突入直後に神矢の家のベランダで色んな意味で衝撃的な出会いをした。ちよくちよく姿を消すくせに、結局は戻ってくる。そうして今日まで居座っているわけだ。

その少女、暑さにやられて犬のように舌をだらりとさせて苦しそうにフローリングに寝転がる少女。

まるで今際の怨嗟のように吐き出したのが先の言葉である。

彼女の正体どころか名前以外の何もかもを知らない少年だが、夏休

みの宿題を中断してこうして律儀にアイスを買いに家を出るのはやはり彼が病的なお人好しだからだろう。

クラスメートの間で、彼のあだ名がキング・オブ・良い人なのも頷ける。

「うん？」

せっかくアイスを買ったわいいがこのままでは家に着く頃には液体に変化しそうだな、と神矢が心配し始めた時、不意に妙な人物が目に入る。神矢が歩く道とは道路を挟んで反対側、反対方向からその人物は歩いてくる。

巫女さんだ。

巫女さんが歩いてきた。

歳の頃は神矢と同じくらいだろうか。日本人らしい白い肌の色。長い黒髪に、黒い瞳は巫女装束と相性はばっちりあっていた。

彼のクラスメートのとある青い髪の友人なら、ここで和美人な彼女に即座に反応していただろうとも思う。……仮に銀髪碧眼のバリバリの外国人が巫女姿でも、彼はきつと喜ぶだろうが。

ただなぜこんな暑い中を巫女姿？　と思う。

巫女さんは外を出歩く時も装束を纏っていないなくてはならないのだろうか。ふと頭に、安全ピンで止めてまで修道服を着続けるシスターの顔が浮かんだ。

彼女たちなりのプライドかなにかだろうか。

反対側を歩く巫女少女が、時折苦しそうにお腹をさすりながら歩い

ている事まで、とある能力の影響で特別『眼』が良い神矢には見えていた。

ホライゾン
絶対観測。

それが神矢の能力の名である。

彼の左目は、視界に映る情報を常人の何万倍にもして読み取ることが出来る。遠くのもが見えるとか、夜目が利くとかそういうレベルではない。普通の人間には知覚できないものすらも観測し、映画のコマ送りのように減速した世界を見続ける。

さらに、そうして得たあらゆる情報から、神矢は限りなく正確な未来すら視る事が出来る。

とはいっても、常にそんな情報に晒されれば少年の脳は負荷に耐えられず簡単にパンクしてしまう。なので普段は、常人より視力が良いとか、人並み外れた観察眼でちょっととした相手の動きなら予測出来る程度の能力でしかない。

「あれ？」

巫女服姿の少女を見かけてしばらく、再び神矢は何かを見つける。

正確には違和感。

空間の揺らぎというのだろうか。目の前の風景が、まるで蜃気楼のように揺らいでいる。

勿論普通の人なら気付く事すら出来ないものだが、神矢にはそれが見える。

少しばかり集中してそこを見てみれば、疑念は確信に変わる。

不自然な揺らぎ、それをなんだろうとは神矢は思わなかった。彼はこれと同じものを見た事がある。先日やって来た魔術師が使っていた結界の境界だ。

「うん？」

イギリス清教第零聖堂区『ネセサリウス必要悪の教会』所属のルーンの魔術師、ステイル・マグヌスは結界内に何者かが入ってくるのを感じた。たった今挨拶を交わしたツンツン頭の少年の反論を無視してそちらに視線をやれば、誰もいない筈のそこに少年が立っていた。

猫っ毛質の茶髪頭。茶髪と言っても毛染めをしたようなはつきりとした色ではなく、おそらく地毛であると思う。藍色の瞳はまん丸で、年齢よりよほど子供に見える。外国人であるステイルにはなおさら、ともすれば少女にも見えなくない彼は、ステイルと、その奥で声を荒げているツンツン頭の少年を見て困惑しているようだった。

「上条？ それと、ステイルさん？」

「神矢？」

名を呼ばれてようやく上条も神矢の存在に気付いたようだった。神矢は上条とステイル、両者をもう一度眺めた後、ほんの僅かに目を細めてステイルを見た。睨んだ、ともいえる。

「これはどういう事ですか？ ステイルさん」

ステイルは口の端の煙草を揺らして笑う。

「うんうん、なかなか心地良い視線だね。君はその彼ほど腑抜けでなくて嬉しいよ」だが、と続ける。「気色の悪い呼び方だね。慣れ合うつもりもないけど、いつそ呼び捨ててくれないかな？」

「性分なんですよ」

そういつて苦笑する神矢。ステイルは忌々しそうに舌をうった。そうして今一度この少年について思い出す。

神矢がステイルの人払いを抜けてきたことに驚きはない。先日的一件でも、彼は一度その特殊な能力で自分の結界を看破し侵入してきた過去がある。

彼もまたオカルト側ではなく科学側サイエンスの人間であるわけだが、ステイルの同僚、神裂によれば魔術の存在を認められる環境の人物だったらしい。そこらへんの細かい事情には興味はない。

だが、個人的にこの少年に興味があるのは事実だった。

本来、科学サイドといわれるこの街に魔術師のステイルが足を踏み入れるのは割と問題だったりする。

しかし、今回はとある魔術師がこの学園都市で、とある生き物を呼び寄せようとしていた。

その魔術師を止める事自体はさほど難しくはない。問題なのは、『魔術師を科学者が倒してしまう』ということ。

『サイエンス超能力』と『オカルト非現実』。

それぞれが束ねる世界への干渉は、容易くそのバランスを崩し全面戦争へと発展する可能性を秘めている。

それを防ぐ為に、今回ステイルは呼ばれた。同じ魔術師が魔術師を倒す事には誰も異論はないからだ。

しかし、彼は今回目の前の少年二人を連れて任務に当たらなくてはならない。ステイルとしては勿論お断りしたい話だったが、それが今回の協力者でありこの科学の街のトップの人間のオーダーなら、下っ端のステイルに断る権利などない。

超能力者が魔術師を倒すのは問題だが、この少年達は超能力者としての才能を持たない無能力者。たとえ失っても、科学側の技術が魔術側に漏れる事は無いし、逆に彼らに魔術を扱える脳を持たない。故になんの問題もない、というのが言い分らしい。

だが、そんなのは屁理屈でしかないことをステイルは知っている。

二週間前、彼らの力をステイルは身を以て知った。

イマジネーション幻想殺し。それが異能であるならば、超能力も魔術も、神の奇跡でさえ右手で触れるだけで打ち消してしまう特異能力。

そして

ホライゾン絶対観測。あらゆる事象を観測し、あらゆる現象を

分析し、果ては未来さえも視通す事ができるといふ特異能力。

ステイルはこの能力について訊いてみた。何故これほどの能力が無能力者なのか。幻想殺しについては得たいが知れないのだからまだわかる。それでも無能力者というのには納得せきないが

。しかし絶対観測についてはこうもはつきりと力の意図がわかっているのに無能力なのは何故かと。

あの『人間』は笑った。

『完全記憶能力というのは知っているかな？』

人並みには、とステイルは答えた。

『彼らはずい最近まで超能力者だと思われてきた。実際、彼らはなんのトリックもなしに伏せたカードを言い当てたり、他者の心を読む事が出来た。』

だが無論、それは勘違いだ。完全記憶能力とはその名の通り、あらゆるものを記憶してしまうものだ。それは例えば、カードの小さな傷や凹み、他者の微妙な表情の変化を記憶と照らし合わせる事も可能だ』

『人間』は笑う。

『完全記憶能力は超能力などではなく体質に過ぎない。絶対観測も同じだ。アレは所詮、見えるものを見ているに過ぎない。常人より

少しばかり『眼』が良いだけの人間だ。あんなものは超能力でも、ましてや魔術でもない。ただの特技に過ぎんよ』

詭弁だ、ステイルは心中で吐き捨てる。

完全記憶能力が、異能ではなくただの体質である事はステイルはよくわかってる。

だが、聖人である神裂と渡り合い、あの子の竜王ドラゴンプレスの殺息すらも棒つきで退けたあの力がただの特技である筈がない。

あの少年の力には、異常な観察眼以上の何かがある。もしかしたらあの幻想殺しと同じくらい、異質な何かがある。

「なんですか？」

突然黙ったと思ったら、じっと見つめるステイルに不審そうな顔を浮かべる神矢。

ステイルは一転、ニタリと口を引き裂くように笑った。

「君達」すつと煙を吸い込み、「三沢塾」って進学予備校の名前は知ってるかな？」

盛大に紫煙を吐き出した。

式

「ヌシはあれか？ 買い物に行く度に毎度道草をくうのか？ それともワシを怒らせて喜ぶ特殊な性癖でももつとるのか？」

「あはは、ごめん」

一旦部屋に帰って来た神矢は、フローリングに転がっている少女に買ってきたアイスを手渡す。少しばかり溶けかかっていたそれを、ベルは不満そうに顔をしかめながら受け取る。口に突っ込むと、幸せそうに顔がゆるんだ。

「それでね、ベル」神矢は自分の分のアイスを冷凍庫に入れながら「ちょっと僕出掛けてくるけど、留守番してくれる？」

「ああん？ シュクダイとやらはいいのかい？」

言われてテーブルに広げている宿題を見る。

「良くはないけど……まあ、まだ日数はあるし」

張り付けたような笑みを浮かべる。

その笑みに何かを感じたのか、アイスを赤い舌で舐めるベルは呆れたように言った。

「なんじゃ、また厄介事か」

本当に呆れたように、少女はため息を吐き出す。

ずばり言い当てられた神矢は困ったように、誤魔化すように笑う。ベルのことは自分なんか心配する必要なんか無い。少し偉そうなんだけど遅い事を、この二週間で知っている。

それでも、神矢は彼女を事件に巻き込む事を良しとしない。

別にベルだからというわけではなく、神矢 真夜という人間は誰も傷ついて欲しくない願っている。誰一人、傷ついて欲しくない。そう願っていても、実際自分には誰かを守るなんて大それた力を持つちやいない事もわかってる。だから、巻き込まないで済むのならそれが一番なのだ。

「ま、勝手にすればええじゃろ。シンヤの命なんてどーでもいいし。じゃけども夕飯までには帰って来いよ」

今から死地に飛び込もうという人間に対する激励にはお気楽な言葉。

しかしそんな気兼ねの無い言葉が、神矢は嬉しくて。

「うん。なるべく早く帰って来るよ」

玄関に立てかけてある布袋を背負って、神矢は部屋を出た。

三沢塾 学歴に興味のない神矢にはあまり聞き慣れない名だが、割と有名な進学予備校であるらしい。その支店の一つが学園都市にもある。

だがその三沢塾は、この都市の能力開発を知り、そこから少しずつおかしくなっていたらしい。

『自分達は特別である』。その思い込みが、彼らをカルト宗教もどきへと変質させた。

事態はそこから更にややこしい事になっているらしい。

カルト宗教と化した三沢塾は、既に潰れているそうだ。科学かぶれのインチキ宗教は潰された。紛れもない本物の魔術師 正確
には、錬金術師の手によって。

だが、この錬金術師は別にこの三沢塾のあり方に憤り潰したわけではなかった。

彼は、三沢塾が捕えていた一人の少女を奪ったのだ。

『ディープブラッド吸血殺し』。

錬金術師はそれを求めた。より正確に述べるなら、その能力を切り札に、彼等と交渉する為に。

吸血殺し。その名が示す彼等とは、伝説上の生き物、吸血鬼の事である。

神矢、上条、そしてステイルは件の塾のビルまでやって来た。
十二階建てのビルが四棟。上空から見れば漢字の田の字を作るよう
にそれぞれに通路がはしっている。
此処に、例の錬金術師と吸血殺しの能力を持つ少女がいる。
パツと見、出入りをする人間にも別段怪しい感じはしない。ただの
予備校といったところだが。

「上条、本当に来るの？」

神矢はそう尋ねる。

上条は至極真剣な表情で頷く。

なんでも、捕まっている少女と上条は知り合いらしい。

仮に知り合いでなかったとしても彼はきっと助けに来ただろうが。

上条 当麻は記憶がない。ただし失ったのは知識ではなく記憶のみ。
なので突然喋れなくなったりする事などはないが、思い出を失った
彼は何もかもが初めての経験である筈なのだ。たとえ知識として知
っているても、経験として思い出す事は無い。それはつまり、今まで
生きてきた彼の全てが失われたといっている。

誰かと共有した思い出も、体験も、全て丸ごと。

神矢は目を伏せる。

そうなってしまうたのは自分のせいなのだ。彼を守ると言っておきながら、それが出来なかった。不甲斐ない自分のせいで、彼は死んだのだ。

隣りにいる少年は神矢の知っている彼ではない。神矢を知る彼ではない。

それでも、神矢は誓った。

上条 当麻が救った少女と、今此処にいる上条 当麻を、今度こそ守ってみせると。

だから、ステイルが今回の事件に彼を巻き込むと言った時、神矢はそれを止めたかった。上条にはあの少女と一緒に、笑って騒いで、幸せに過ごしていて欲しかった。

しかし彼は此処にいる。たった一人の少女を救う為に。それはまるで、記憶を失う前の彼のようだった。だから、神矢にはそんな上条を止められなかった。

「談笑は済んだかい？」ステイルはのんびりと「なら行くよ」

ステイルを先頭にビルの内部へ。

外から見た時もそうだが、中も変わった所は何一つ見当たらない。ガラスの多い建物だ、というぐらいで、此処が元カルト宗教、現在は錬金術師に支配された建物だとは思えなかった。

だからこそ、その違和感は強かった。

「あれ？」

上条も気付いた。ステイルはとつくに気付いていた。神矢は一見して理解し、苦い顔を浮かべる。上条はそれに気付かなかった。

四基並んだエレベーター。その傍らに、西洋の甲冑を纏った人型が手足を投げ出して壁にもたれかかっている。

「なんでこんな所にロボットなんかがあるんだ？」

上条は気付かない。

その不自然さに。神矢の表情に。

ただ、赤毛の魔術師だけが何のこともないように、平然と真実を告げる。

「何を言っているんだ君は。あれはただの死体だよ」

上条はステイルの言葉を理解出来ず、呆然とした表情で神矢を見る。それでようやく神矢の浮かべる悲痛な表情に気付いた。同時に、ステイルの言葉を理解してしまった。

上条はさっと顔色を変えて、甲冑の人物に駆け寄る。

「上条！」

呼んでも止まらなかった。

近付いてみればその正体はより明らかだった。

手足は鎧ごとまるで紙コップのようにぺしゃんこにされ、鎧の間から夥しい量の血液が流れ出ている。

絶対観測で視る必要もない。致命傷どころではなかった。もう……。

「無駄だよ」

ステイルはつまらなそうに言った。

「それはもう助かる傷じゃない」

そんな酷薄な態度に、上条はかっとなってステイルの胸ぐらを掴みあげた。

「て、めえ」

「退け。もうそいつには時間がない」しかしステイルは簡単に上条の手を払い「死者を送るのは僕の役目だ。素人は黙ってる」

やはりどこまでも淡々と、しかしどこか不思議な気迫に上条は思わず後ずさる。そんな彼の肩に神矢は手をやると、上条は大人しく退

いた。

上条は普通の高校生だ。神矢とは違い、本来ならこんな場面に出くわすことなく一生を過ごす平凡な男の子の筈だ。

ステイルは魔術師だ。こうした死を目の当たりにするのも初めてではないだろうし、自らの手で人を殺す事もあるだろう。

しかし、両者にそれほどの違いはない。

上条は素人で、ステイルはプロなのかもしれない。しかし、プロというのは死に対して慣れる事では決してない。死を目の当たりにして本当に心に響かないのはただの化け物だ。

プロはただ上手いだけだ。

心を隠すのが上手いだけ。プロとそうでない者の違いなんて、それだけでしかない。

「上条、君は帰った方がいい。これ以上は……」

これ以上、彼のそんな顔を神矢は見たくなかった。

「その意見には同感だけど、もう手遅れだね」

騎士の葬送を終えたステイルは立ち上がるとそう言った。

「どつという意味ですか？」

神矢が尋ねると、ステイルは顎で示した。それで神矢も上条も理解した。

おかしい。こんな死体が置いてあるのに、神矢達があればほど騒がしくしているのに、どうして周りはこんなに無関心なんだ？

「コインの表裏、と言ったところか」

辺りを見回してステイルは言う。

「結界だよ。僕達はコインの裏側。周囲にいる彼らは表側。表の住人に、裏の世界は見えないし触れない。同様に、裏の住人である僕達は表の彼らに干渉する事は出来ない」

ステイルは忌々しそうに舌をうち、神矢を見た。

「君の眼でも気付かなかったのかい？」

言われる前に、神矢は既に絶対観測の能力を発動させて辺りを観測してる。

僅かに強化した影響で左目が黄金色に変わる。知識として知っていても、初めて見た上条はその変化に驚いているようだった。

「……っ、範囲が広すぎて気付かなかったんだ」

改めて見回してみれば、この空間　　否、このビルそのものが
異能の力に呑み込まれていた。
あまりの規模に、逆に気付く事が出来なかった。

コインの裏側の住人は表に干渉する事は出来ない。そしてこの建物
自体は表に属している。
という事は、裏側にいる神矢たちではもう扉一つ開ける事が出来な
い。
後戻りはできない。完全に閉じ込められたという事だ。

「俺の右手なら……」

「無駄だろうね」

上条の言葉を、ステイルは短くなった煙草を地面に捨てながら切り
捨てる。

「これは僕の魔女狩りの王と同じ。魔術の核を潰さない限り結界は
破れない。そして定石通り、おそらく核は結界の外に置いてあるん
だろうね」

ステイルの言葉が正しい事は、神矢の眼でもわかった。

建物を包む力は絶えず循環し続けていて、仮に上条の右手で一部分を破壊しても瞬く間に修復してしまう事だろう。

結論は単純にして明快。増援の無い神矢たちには結界外の核を破壊する術はない。

ならば進むしかない。そして術師を倒すことでしか表に戻る事は出来ない。

錬金術師、アウレオルス・イザードを。

最初に訪れたのは南棟の五階食堂。ステイルの話では、手に入れた建物の設計図と、赤外線や超音波を使った測定に食い違いがでてくるらしい。

結果、この場所に不自然なスペースが生まれている。それはつまり隠し部屋の可能性だ。

そういった違和感を見つけるのに、神矢の左目は特に役に立つ。あらゆる情報を観測する神矢の左目は、空間の違和感、痕跡を逃さない。

だったのだが、首尾よく隠し部屋を発見したまでは良かったが、結局、出来たのは隠し部屋の有無の確認だけでそれ以上やれること

は無かった。

問題はその後に起きた。

裏の住人である神矢達は表の世界に干渉する事が出来ない。同様に、表の住人である学生達には裏を意識することが出来ない。彼らに神矢達は見えないし、気付けない。

それなのに、彼らは神矢達を見た。

最初に異常を感知したのは魔術師であるステイルだった。続いて神矢、最後に上条も異常を理解する。

おそらく隠し部屋の近くには警報装置のような役割を持つセンサーが存在していたのだ。

センサーの役割は二つ。一つは侵入者の存在を知らせる警報^{アラーム}。もう一つは……侵入者の撃退^{インターセプト}。

神矢達は慌てて食堂から飛び出した。

後ろからはピンポン球程度の大きさの光球が追いかけてくる。通路を埋め尽くすほど、膨大な数の攻撃が。

「ちっ、レプリカとはいえ『グレゴリオの聖歌隊』を作り出すなんて」

背後から迫るのは超能力ではなく魔術。専門家であるステイルは苦しそうに走りながら、

「アウレオルス＝イザードという生き物を甘く見ていたかな？」

「ステイル！ なんとかしやがれ！！」

「うるさい！ 君の方こそなんの為の右手だ。あんなもの、その右手なら簡単に防げるだろうが！」

「数が絶望的だバカ！ あんな数、右手一本で対処できるかバカ！！」

「なっ……誰が馬鹿だと！？ しかも今二度も言ったな！」

一般人の上条や、元々体力の無いステイルと違い、根本的に鍛え方の違う神矢は二人より余裕をもって後ろを走りながら、ギヤース力騒ぐ二人の背を見て思わず苦笑する。

なんとも緊張感に欠けるが、これ以上なく頼もしい。

しかしそれも通路の前方から押し寄せる青白い洪水をみて吹き飛ばす。階段しかない。上か下か、一瞬迷う。

「ならば秘策を使おう」

危機的状況でありながら、ステイルはのんびりと構える。当然上条はそれに噛み付いた。

「そんなもんがあるならさっさとしろ！！」

「そうかい？」

わかった。

神矢はギクリとした。

なんとステイルは上条を階下に突き飛ばした。

「上条！」

神矢の手も間に合わない。

上条は勢いよく階段を転がり、一番下でようやく止まった。

「ステイル！！」

思わず声を荒げてしまう神矢。

だが突き飛ばした本人は、神矢の怒りさえそよ風程度に聞き流し、
楽しそうに笑いながら上の階に向かう。

神矢は上条の方に駆け寄ろうとして、止まらざるを得なかった。

後方から追ってきていた光球はすぐ近くにいる神矢を無視して、既
に上条に向かって下りの階段に殺到していた。

もう上条を追う事は出来ない。

「俺は大丈夫だ！ 神矢も逃げろ！」

階段を転がり落ちたダメージから脱した上条は、留まっていた神矢にそう叫びながらさらに階段を下っていく。そんな状態でありながら、なお他人を気遣って。

「くそっ！」

己の無力さに腹を立てながら、神矢も階段を駆け上る。

上階で、ステイルは呑気に煙草をふかしていた。ステイルは階段を上ってきた神矢に気付くと親しげな笑みを浮かべて片手を挙げた。

「やあ、遅かったね」

それは待ち合わせ場所に遅れてきた友人に対するような完璧な笑顔だった。

神矢は一切歩くスピードを緩めず、むしろ早めてステイルに近付くと片腕で胸ぐらを掴みあげた。背の高いステイルの足が僅かながら浮くまで高く。

「……っ、凄い顔だ」

若干苦しそくに、しかし魔術師は馬鹿にしたような笑みを浮かべる。それが、神矢には我慢ならなかった。

「なんで上条を囮にした？」

神矢の声はいつもより数段低く、だからこそ胸の詰まるようなプレッシャーを感じる。

「君はあの男とは違って、どちらかといえば僕ら寄りだから説明する必要は無いと思っていたのだけだね」

「答えろっ！」

さらに高く持ち上げられて、完全にステイルの足は床を離れた。

「僕はその子以外守るつもりは無い。ましてやあの男を守ってやる義理は無い」

「あいつを守ってやる事が、あの子の為になるとは考えないのか？」

魔術師の瞳が僅かに揺れた。

かつて、その場所に居たのはこの少年だったのだ。瞳が揺らいたのは一瞬だけだった。切り替わった彼の眼に、迷いはなかった。

「だとしても、僕は彼女を守る為の最善を尽くす。僕はその為なら誰でも殺す。いくらでも壊す。そう決めた」

ステイルは神矢の手を振り払う。

地に足を着けたステイルは、首元を正し、呼吸を整える。

ステイルは決して間違っていない。

彼は決してぶれない。自分が真に守りたいものを理解しているから、なにを差し置いても守りたいものを守り抜く。

何もかもを救ってみせる力なんて、ハッピーエンド大団円が約束されている漫画やアニメの主人公にしか与えられちゃいない。現実の人間は、誰しもそんなに強くなれない。

「それに」ステイルは口に笑みを浮かべ「彼がそう簡単に死んでくれるとは思えないしね」

そう言った彼の表情に、神矢は怒りも覚めてきよとんとする。

ステイルの顔は、決して心優しい者が浮かべる穏やかな笑みでも、残酷な決断をする魔術師の表情でもなかった。

なんというか、気心が知れた親友が相手を信頼するような
いや、宿敵だと認めたからこそその一種の信頼。
どちらにしても、彼は上条が死ぬだなんてこと、これっぽっちも考
えちゃいなかった。

「さて、能力者」

唐突に呼ばれて神矢は驚いた。
直線の長い通路。その壁を、ステイルはノックするように小突く。

「此処に何か見えるかい？」

先ほどの衝突など無かったかのように平然と喋りかけてくる。それ
は、彼がただ感情に流される子供ではなく、状況を優先するプロで
あるという証明でもある。
言われて、神矢は左目でステイルが示した壁を視た。

「妙な流れが、壁の奥に集まっています」

「うんうん。やはりね」

魔術師は満足そうに煙草を揺らしながら頷いた。

「おそらくそれが『グレゴリオの聖歌隊』の核だ」

グレゴリオの聖歌隊。それが先ほどから追いかけてくる光球の名称らしい。

本来魔術を扱えない学生達に魔術を使わせている、その司令塔のような役割を持ったそれが此処にあるとステイルは言った。

「でも、今の僕たちにこの壁は壊せないんじゃない……」

コインの裏側の人間は、表の世界に干渉する事は出来ない。

つまり、表にある壁の内側にその核とやらを隠してしまえば、これ以上ない鉄壁の箱となるわけだ。

「なんだ、もう口調は戻ってしまったのか」

ステイルは特に興味もなさそうに指摘する。

言われて自覚した神矢は、先ほどの自分の醜態に苦い顔を作る。

ステイルはそれで満足したようだった。

「問題ないさ」

そう言っつて、ステイルは一枚のカードを取り出す。トレーディングカードのようなものだった。

それは彼が魔術を使う際に使用するルーンの刻まれたカード。

その様子を見守っていた神矢は背後の気配に気付き振り返る。居たのは、この場でなんの違和感のない学生だった。おそらくこの予備校で習う受験生の少年。

しかし、コインの表にいる筈の彼は裏にいる神矢を確かに見ていた。

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白」

「罪を罰するは炎」

「炎を司るは」

「煉獄」

声が重なっていく。

前から、後ろから、部屋から現れる学生たちの無機質な声が、まるで歌のように荒れ狂う。

それと同時に、彼らの皮膚が内側から弾ける。

超能力者に魔術は扱えない。使えば、体が耐えられない。

「ステイルさん！」

背負っていた布袋から木刀を抜いて、しかし神矢はどうすればいいのかわからなかった。

彼らを救いたい。ならどうすればいいか。

このままでは自分達も危ない。ならどうすればいいか。

神矢の左目は、彼らの体が壊れていくことも、彼らの魔術が完成しそうなことも視えていた。

それでも、どうしたらいいかわからなかった。

「心配ないよ」

この状況下にあっても平静だったステイルのカードから、彼の得意とする炎が舞い上がった。炎は少年達にも、少年達の魔術に向かうでもなく、先ほど示していた壁に向かった。

たとえ壁自体がコインの表に属していても、形のない炎はその僅かな穴や歪みから中に入り込む。

結果、絶対の鉄壁に守られていた魔術の核は、炎に巻かれ砕け散った。

途端、学生たちは糸が切れた人形のようにばたばたと倒れていく。当然、彼らが行使していた魔術は風船のように破裂して消滅した。

核は砕いた。それでも、神矢は手放して喜ぶ事は出来なかった。

辺りに倒れている学生たちは、皆無理な魔術の行使に体を内側から爆発させられていた。

此処だけではない。きっとこのビル中の学生全員が、同じ状態だろう。

自らの血の海に沈んだ彼等だが、まだ辛うじて生きている事だけが救いだっただ。

どうやら見た目に反して傷は浅いようだ。

早く治療を

そう考えた神矢の耳に足音。

それはまるで、この世の全てを統べる王者を思わせる、絶対的な自信と確信をもった歩き方。

足音は速くもなく遅くもないペースで歩を進め、やがて姿を現した。

「当然、侵入者は三人だった筈だが？」

姿を見せたのは細身の体を高級そうな純白スーツに包んだ長身の男だった。

緑色の髪はオールバックに纏められており、その何もかもが、彼の美貌によって成立していた。

アウレオルス・イザード。このビルの主が、堂々と姿を現した。

神矢は困惑していた。

目の前に現れた男、アウレオルス「イザード。彼はステイルに前もって聞いていた特徴に当てはまる。ならば間違いなくこの男が、三沢塾を乗っ取り、吸血鬼を支配しようとする錬金術師なのだろう。だからこそ、神矢は困惑する。

何故アウレオルスはいま此処にいる？

ステイルの話では、彼は正面から力勝負するには少々物足りないという事だった。故に、既に吸血鬼を従えていない限り敵ではないとこの話が仮にステイル自身の過信からきていたとしても、実際神矢もこの建物の仕掛けを直に味わってみてアウレオルスという錬金術師が正面切って戦うようなタイプでない印象を受けた。

ビルそのものを要塞化するだけでなく、コインの表裏という絶対の城壁、学生達を使った迎撃装置。

如何に己の力を活かすか、というより如何に敵を近付けず排除するかのような戦い方。卑怯なのではなく、そういった戦闘を得意としているのだと思った。

しかし、いまアウレオルスは目の前にいる。

神矢かステイル、どちらかを負傷させたわけでも仕留めたわけでもないのに。むしろ、迎撃装置の核を破壊された相手にとって最悪のタイミングで現れた。

「それで、戦闘向きでないお前が僕を招きよせるとはどういうつもり

りなんだ、キユリオディーラー骨董屋？」

心からの侮蔑を込めたステイル。その眼は微塵も笑っていない。

「お前は何をしに来た？ 結局此処にある限り、聖域と化した建物が戦うだけ。お前自身は何をするんだ
いや、お前に何が出来るんだ？」

「貴様」

「繰り返そうか？ 僕はお前に用は無い」

「厳然、貴様ッ！！」

アウレオルスが動く。スーツの右袖からダラリと黄金の鍍めいろうのような物が垂れた。

「リメン
「アウレオルスは鍍の切っ先をステイルに向けた

「マグナ！」

途端、まるで弾丸のように鍍が射出された。空気を切り裂き、ステイルの顔目掛けて迫る。しかし鍍は突然与えられた下からの衝撃にその方向を変える。軌道の逸れたそれは、ステイルの横を通り過ぎる。

微塵も避ける素振りを見せなかったステイルは、一瞬前の危機など忘れたように呑気に紫煙を吐き出す。

その眼前で振り上げられた木刀をなぞるように眺め、やがてそれを持つ少年へと笑みを向ける。

「僕は君にお守りしてもらうほどだらしないつもりだけど？」

「つい」

困ったように笑う神矢。振り上げた木刀を下す。

すると、グチャリと木刀の溶けた。続けて、柔らかな果物を裂くような音。振り向けば、鏃の一撃を運悪く受けた学生。

その体が、弾け飛んだ。

「な……」

言葉を失う神矢。

木刀の先端も、弾け飛んだ学生も、まるで強力な酸を浴びせられたかのようにドロドロの液体に変わってしまった。

それもただの液体ではない。高熱で溶かされた純金。

黄金の湖。それを眺めながら、神矢は敵の異名を思い出した。

錬金術師。

「自然、何を驚いている？」黄金の鎖に繋がれた鏃を手元に戻しな

がら「我が『瞬間錬金^{リメン・マグナ}』は触れた物を即座に純金へと変換する。必然、完璧なる防御も逃避も不可能」

触れた物を強制的に純金へ変換。

そんな馬鹿げた魔術があつていいのか。

たとえ強固な盾を持つと、あの鍬の前では無意味。

「お前……」

炎の魔術師も愕然と、凍りついた表情で呟く。

「何だつてそんな無駄な事をしているんだ？」

あり得ない物を見たかのように、しかしステイルから出た言葉は神矢やアウレオルスが予想していた言葉ではなかった。その反応にもまた不審そうにステイルは眉をひそめる。

「何を驚いているんだい？ 『瞬間錬金』だつて？ そんなもの、強酸をぶちまけて溶かす事と何か違いがあるのか？」

ステイルは呆れたように首を小さく横に振った。

「所詮は偽物か」

「な、に……？」

「なんだ、そんな事にも気付けないのか？」

今度こそ本当に呆れたように肩を大きく落とす。

「なら訊くが、お前は何故吸血鬼なんていう『人間の外にいるモノ』に触れようとする？」

「……………」

「ふん、答えられないのだろうか？ 錬金の目的は真理の探究。とりわけお前は『人間』について探っていた筈だ。それが何故吸血鬼を求めたか」

「や、める」

神矢には視えた。アウレオルスⅡイザードが、否、アウレオルスⅡイザードの形をした目の前の男が壊れていくのが。ステイルの言葉がパズルのようにカチリとはまっていく度に、逆に彼自身が崩れていく。

「お前には何もわからない。アウレオルスⅡイザードがやっている事、やろうとしている事。」

錬金術師の本分すら忘れ、瞬間錬金なんていう魔術そのものに子供のように喜んでしまったお前に答えられる筈がない」

「黙れ！」

毒のように侵入してくる声を打ち消すようにアウレオルスは袖口から鏃を飛ばす。

それは一度ではなく、射出と巻き戻しを高速で行い、まるで機関銃のように大柄な魔術師の体を貫いた。

「ステイルさん！」

ステイルの言葉に聞き入っていて反応が遅れた神矢はこれを撃つ落とす事が出来なかった。

穴だらけとなったステイルは、しかし純金になるわけでも血を吹き出し倒れるでもなくその場に立ち尽くす。

「だから何度でも言う」

声はアウレオルスの背後から。

破壊され尽くした魔術師は消え、代わりにアウレオルスの後ろに現れた魔術師の手には炎剣が生まれていた。

途中から、あれが蜃気楼であると思抜いていた神矢は木刀を下す。

あの一撃を、もう彼は躲せない。たとえ充分に余裕があっても、も

うあの男は己の在り方を忘れているのだから。

「僕が用があるのはアウレオルス^{ダミー}イザードだ。お前じゃない、錬金の真似事」

三千度の炎剣は一直線に振り下ろされ、アウレオルス^{ダミー}の手足を叩き斬った。

「が、あああああああああああああああああ！！」

はたしてその絶叫が、切られた手足の痛みからきたものなのか、それとも壊れていく内側に向けられたものなのか、神矢にはわからなかった。

ただ、その魔術も手足も、人格すら借り物だと知らされた男はこれ以上見ていられるものではなかった。

それでも、咆哮と共にダミーは瞬間錬金を振り回した。

それはステイルを狙ったわけでも、神矢を狙ったわけでもなく、辺りに倒れる生徒たちを貫き純金に変えていく。

さらに鏃を振り回し、黄金の溶岩を礫のように神矢達に放ってきた。触れれば火傷では済まない。

神矢は左目で礫の軌道を観測、予測し、全て躲す。あちらではステイルも炎剣で飛沫を防いでいた。

全て終えた後、アウレオルス^{ダミー}の姿はもうなかった。

通路には、長さにして五メートル強の高熱の純金の川が出来ていた。それを見て、ステイルの方は彼をそのまま追うのを諦めたようだった。建物の構造的に、回り道すれば行けない場所は無い。

「僕はこっちから行きます」

対して神矢は迷わず川を飛び越える事を選んだ。

ステイルはそれに興味は薄そうに、しかししっかりと反応する。

「神裂とやりあった君の運動能力に心配は無用だろうけど、失敗すれば火だるまだよ？」

「それでも、一刻も早くあの人を止めないと」

追いつめられたあの錬金術師がどんな事をしでかすかは、先ほどの逃走の一手を見ても明らかだ。

早く追わなければこれ以上に犠牲者は増えるし、何より……。

「あれは人間じゃあない」見透かしたように赤毛の魔術師は言う。
「基礎物質にケルト十字を使ったテレスマの塊。アウレオルス・イザードという男をかたどった造形物だ。だから」

「だから？」

魔術師は言葉を嚙む。

神矢は怒るでもなく、やはり笑っていた。

「それでも、僕はあの人も助けたい」

「……ふん。そうかい」

それきりステイルは背を向けて行ってしまふ。

神矢は一度だけ川の長さを測り、十二分の助走と着地点を選んで跳んだ。無事渡りきった事に喜ぶ事もなく、すぐさま駆け出す。

着いた先は既に戦場だった。

ステイルに焼き切られた左手足を、武骨な黄金の棒で義足代わりにしたアウレオルス「ダミー」。それと相對するのは見覚えのある黒髪のツンツン頭の少年。その隣には、巫女服姿の少女。その彼女に抱えられている傷だらけの少女は、おそらく塾の生徒だろう。

神矢はいまアウレオルス後ろを突いた形になっている。ならばこのまま駆けて、背後から奇襲を仕掛けるか。そう考えていた神矢はぎよっとする。

アウレオルスが動いた。あの挙動は瞬間錬金の構え。それだけで視えてしまった。

「やめろアウレオルス!!」

ダミーに神矢の声は聞こえていない。

狙われた先で身構える上条。

しかし違う。神矢には視えている。ダミーは上条なんて狙っていない。

「上条！ 姫神だ!!」

その一声で上条も気付くが、遅い。

神矢と鏃の距離は絶望的に遠く、上条が反応するにはあまりにも遅い。

黄金の鏃は、未だ状況がわからずぼんやりしていた巫女少女の眉間に迫り　しかし、直前に差し出された手がそれを阻んだ。

神矢の左目は未来が視えるわけではない。

いま見えるあらゆる情報を観測することで、最も起こりうる未来を想像するだけだ。

だから、こんな事予測出来なかった。

気を失っていただろう傷だらけの少女が、殺されそうだった女の子を守る為に身代わりになるなんて。

彼女はまだ呆然とする黒髪の女の子を突き飛ばして、一瞬遅れてから黄金となって砕け散った。

「　　」

神矢は歯を喰いしぼり、それでも足を止めない。それに対し、ダミーは振り返った。

「当然、気付いているぞ！」

射出される黄金の弾丸。

しかし、それでも神矢は足を止めない。

地を這うように低い姿勢で疾駆し、先端の欠けた木刀を構え、繰り出される鏃を迎え撃つ。

一撃目。首を左に傾け躲す。

二撃目。鏃と鎖の継ぎ目付近を刀で弾く。

三撃目。これは当たらない。無視。

鏃にしか黄金に変換する力がない事はわかっていた。

「クッ……」

ダミーは袖からさらに黄金の鏃を垂らす。どうやら仮に壊してもいくらかでも補充可能らしい。

四、五、六の同時射出。それでも神矢は一切足を止めず、跳んだ。

空中で体を錐もみ状に回転させながら三つの鏃の間を縫うように躲す。

今度こそ、ダミーの表情が驚きが変わる。これ以上の接近は危険と、さらに二本増やした必殺の鏃を繰り出す。

上下左右正面と、およそこの通路で考えられるあらゆる方向から神矢を狙う。

だがやはり、神矢の足は止まらなかった。

神矢は再び跳ぶ。但し今度は斜め横に。

そのままいけば壁に激突だが、壁を蹴りつけさらに上へ。黄金の波濤の届かない天井を蹴りつけ、再び地上へ。

間合いにして絶望と思われたダミーとの距離を遂に埋めた。

しかし、神矢はダミーの横を通り抜ける。

これ以上、犠牲者が出るのは嫌だった。上条や、あの女の子、たとえ相手が敵であっても。

なら今は上条と共にあの少女を守り、此処から逃げる事が神矢に選べる限界だった。

「き、貴様も私を

」

自分に見向きもしない少年の背に、ダミーは黄金の川を跳ぶ空中を狙った。

「必然、空中では避けられまい！」

「視えてるよ」

神矢は木刀を円を描くように縦にクルリと回す。背中を貫く前に、下から鎖を揺らされた鏃は狙いが逸れてしまう。

たとえ直接見ていなくても、空気の乱れや光の具合で視ようと思えば背後だって視える。

虚しさばかり覚える攻防。俯く神矢の隣りを、前方から何かが通り抜ける。

「上条!？」

神矢とは反対側から黄金の川を跳んだ上条は空中ですれ違ふ。

上条は神矢に目も暮れず、いま神矢が弾いた鏃の鎖を掴んだ。

「ぐおおお!」

ダミーの絶叫。それすらうるさいというように、上条は鎖を手放す。代わりに拳を握った。血だらけの拳を、さらに痛めつけるように。

それこそ見なくてもわかる。ダミーは上条を黄金に出来ない。すれば、灼熱の溶岩となった上条がダミーを呑み込む。

逃げるほか選べなかった。

先に着地した神矢は、振り返らなかった。

足音が一つ遠ざかる。続けて、上条が着地する音。

「……姫神を、頼む」

そう言つて、神矢の返事も聞かずに上条はダミーを追って走り出す。

彼と自分の差だった。

神矢には、あのダミーを殴つてやる覚悟がなかった。

何もかもが偽物だと言われ、ボロボロに壊れてしまったあの男を、可哀想などと同情し、殴つて止めてやる事が出来なかった。

そんなのは、捨て猫を見てただ可哀想と言っている事と同じだ。

自分で拾つて飼つてやる事もしない。だからといってただ見捨てる度胸もなくて、何をしてやるでもなく頭を撫でて、ただ可哀想だねと語りかける。

責任が発生する事を恐れて、選ぶ事を拒んだ最低の傍観。

そんな男に誰かが救える筈も、守れる筈もない。

上条やステイルなら迷わない。自分で選ぶ。

たとえそれで何か起きてしまふ可能性があつても、ぼかしたような同情も、言い訳もしない。

救う責任も、見捨てる罪も全て負う。

それが、誰かを救う、誰かを守る覚悟だ

「あの」

見れば巫女服の少女がこちらを心配そうに見ていた。なんでも見える左目があっても、自分の顔は鏡がなければ見えない。なので神矢は、なるべく笑顔でいる事にした。

「えと、君が姫神ひめがみ 秋沙あいなさんで間違いない？」

あまり表情の変化が見られない少女は幼児のように素直に頷く。

「上条……さっきの人から事情は聞いた？」

「私を、連れて帰るって」

どうやら聞いていたらしい。しかし彼女は予想外の返しをしてきた。

「何で？」

「何でって……助けに」

言いかけて止まった。

自分には、誰かを助ける力も覚悟も無い。

妙な間に姫神が首を傾げるのを見て、言い直した。

「姫神さんは捕まってるんじゃないの？」

「違う」

その答えには神矢も驚きだった。

「私には私の目的がある。此処で。あの錬金術師がいなければ不可能な目的」

姫神の言葉に嘘の時のような揺らぎは無かった。念の為左目で視てみても、おかしな所は見当たらず洗脳を受けた痕跡もない。つまりこれは彼女自身の言葉。意志だという事だ。

まあ確かに、元々彼女を監禁していたのは本来の三沢塾の人達であり、アウレオルス・イザードが彼女を監禁しているという話はステイルからもでてこなかった。なら、いまアウレオルスと彼女は協力関係にあるという事か。

「吸血鬼。知ってる？」

今まさに聞こうとしていた事を先んじて聞かれた。

「何も変わらない。私達と。泣いて。笑って。怒って」

小さく笑う彼女は楽しい思い出を語るようだった。それが、一瞬で消える。

「私の血はそんな人達を殺す。甘い匂いで集めて。殺す。殺し尽くす」

神矢は、ステイルが言っていた事を思い出す。

ディープブラッド

吸血殺し、姫神 秋沙の過去。

元々は京都の山村に住んでいたが、ある日、村は全滅した。駆け付けた人間が見たのは、無人の村と、村を覆い尽くす白い灰。そして、灰の海に立ち尽くす姫神だった。

「だから結界の張ってある此処に？」

姫神は頷き、言う。

「私はもう。殺したくない」

泣きそうな声ではなかった。むしろ、力強い。

「誰かを殺すぐらいなら。私は自分を殺してみせると決めたから」
それに、と続けて「アウレオルスは言った。助けたい人がいると」

勿論、それはダミーではなく本物の方だろう。

「助けたい人？」

「そう。でも自分の力じゃ助けられない。彼らの協力が必要だつて。私は嬉しい」そう言って初めて笑う。「この力が。誰かを殺す為じゃなく。助ける為に使える」

笑った。それが神矢には辛かった。

姫神の言葉に嘘はないだろう。そして、もしかしたら本物のアウレオールの願いも本当なのかもしれない。

それでも、やはりアウレオルスは間違っている。

たとえ誰かを救いたいという願いが本当でも、いまもこうして別の誰かが傷ついている。誰かを犠牲にした救いなんて、本当の救いじゃない。

それなのに、神矢には何も言えなかった。

アウレオルスや姫神の、二人の覚悟を踏みにじって突きつけてやる覚悟が、神矢には無かった。

それを体現していた『彼』を知りながら、神矢は黙った。

きっと彼なら、間違っているとはっきり言って姫神にもアウレオルスにも手を差し伸べるのだろう。

それが、自分には出来ない。

参（後書き）

ダメーってアニメはいないんですよね。

アニメしか観てない人にはなんじゃこりゃ、な展開かと思えます。
が、彼だって頑張ったのです！

……マンガはいたのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0604y/>

とある魔術の禁書目録 大罪者

2011年12月1日01時46分発行